英雄よ、生まれ給ふ事勿れ

おーり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神話の時代ではあるまいし、英雄などとは生まれて良いことなんて微塵も無い。

超常の力を得た者が支配階級に収まらないとなると、それは治政の邪魔で在る。

王にとって、それらは悪政や悲劇の象徴でしかないのである。

そんな理論武装がオリ主にあったわけでは無いが、賢者の孫が活躍することはこの世界線では一切ない。

修正力という胡乱なモノは働かない、『理屈を正しく並べ直す』。

ただそれだけの、原作（未来）も知らない色黒白髪の異世界生活。

英雄譚には成り得ない、そんな物語の始まり始まり。

※あらすじ並びにタイトル改定しました

目次

賢者の孫と烏丸イソラ（暫定）――1
シン・ウォルフォードと臭い飯――7
転生者ではない男――16
気になる男とゴールデンクラッシャー――25
カート・フォン・リッツバーグとオリバー・シュトローム――36
カート・フォン・リッツバーグと入学式――45
カート・フォン・リッツバーグとシン・ウォルフォード――55
なんだかんだと孫を酷評した男――67
色黒と妹――77
帝国と自由商業連合国――87
帝国と神聖国――98
ホワンホワンホワ～ン烏丸～――113
アウグスト殿下とオブシディアス　邂逅編――127
這い拠る混沌モドキの愉しい魔法講義　愚痴り編――142
帝国を迎撃せよ！――160
遊んだらキチンと片付けましょう――176
もう無理もうダメそろそろエタる――194

賢者の孫と烏丸イソラ（暫定）

「此処がアールスハイド王国かー、わくわくするなー」

某野原さんのコラ画像みたいに、浅黒い肌の少年が街並みを見上げていた。

その口調は間延びしたモノで、何処か棒読み感が拭えない。

わざとらしいくらいに『自分は他国から来ました』と主張する在り方はむしろ『疑ってください』と両手を広げて会敵を誘っている形（ナリ）なのだが、周囲の群衆はそんな少年の在り方に一切の疑念も抱いていなかった。

この様相を『平和の証拠』と捉えるのは容易い。

しかし、少年の抱いた感想は、

「（教育がなってねーな。お隣のブルースフィア（帝国）が禄でもない政策を強いていて、しかも侵略に乗り気なのに国交と境界線が緩々。踏み込まれてからでも勝てる、っていう自信の裏打ちかも知れんけれど、間諜の目が国内に少なすぎるし俺に対して働いてない。慢心し過ぎぃ、英雄王くらいに実力付けてから言ってよね！）」

辛辣だった。
心中でおどけた様に国政に唾を吐くロクデナシは、しかし露店主には笑顔で値段を聞く。
小麦と羊毛と織物、串肉に白菜に果実。白菜!?（二度見。
一人で抱えられる量を計って、時に値切って買ったり買わなかったり。
値の変動を予測して、市場に出回っている品目を検めて。
ちなみに魔道具は変動が無いので対象外だ。
道具の精度によっては文化革新の気配を知れるが、よっぽどの『劇薬』でも投入されない限りは変わりはない。
それも、『誰かが開発した』という程度では、本当に変動が無いのが魔道具流通の背景だ。
制作側が利権を握っているので、国家が裏から手を回さない限りはいっぺんに換えられようも無い。
この少年にとっては、あまり関係の無い話だが。
路地向こうにある劇場への行列に、何処かの子供が驚いた声を聴いた。
それに目を向ければ、少女が二人。

厳つい半裸の男たちに取り囲まれている姿を、正面に見つけてしまっていた。

「あー、「お嬢さんがた、お困りですか？」……ん？」

なんだか、科白がハモったような。

■

お困りです！　という返事は如何なモノか。

さておいて。

自分たちが魔物を狩って生活を守ってるんだぜヒャッハー！　と声を張って、少女を襲う事への大義名分を主張した世紀末な方々であったが。

……いや、生活守っているなら猶更街中で迷惑行為に勤しむのは駄目だろ……。

完全にチンピラ系の理論を発揮していたモヒカン、間違えた、モヒカンは居なかったが世紀末（モヒカン）な御仁共。

反対側から声を掛けていた少年の、「女の子を狩っちゃったら悪人だろ」という科白に逆切れし、殴りかかって返り討ちにされていた。

うわぁ、この国、このレベルでハンターが成立するの……？

「蚊虻の如き、ってやつだね」
「ぶ、ぶんもう……？」

おや、伝わらなかったか。
要するに、

「クソザコ、ってことだよ」
「舐めてんのかテメェもぉアーーーッ!?」

雑魚ぃチンピラでも、少女らを取り囲むことを取り止めてはいない。
そりゃそうよね、初めから目的はこの娘たちなのだから、逃そうとするはずもない。
こちらが少女らを壁際から連れ出して居なければ、どんな被害が広がるか。
最悪、人質としてハラスメントな行為（コト）に及ぼされるのも精神衛生上好ましくも無いので、手早（ひょいひょいと）くモヒカァンな方々から引き離しておいた。
そんな中で挑発を咬ましてしまう少年の、好戦性が普通に目に余る。

こちらのツィートに反応した少女の漏らしたお言葉で、避難に気付かれて激昂したチンピィラの股間を軽く潰し早急に退避。

金的とは、内臓なのだッ！

「熱を持たせると生殖機能が著しく損なわれるから体外に出ているだけであって、急所なのは間違いが無い。なので、襲われたら真っ先に潰すべき場所、覚えておきなさい。でなければ眼球ね」

「エッグ……！」

「わ、わかりました」

「いやシシリー!?　これ了承したらダメなやつぅ!?」

「……えーと、怪我は、無い……？」

チンピィラの方々を、割と俺よりもエグぃ体術で潰して来た少年が、所在なさげに声掛け事案。

受け身も取らせねぇ。

おいおいおいおい、死んだわモヒカァン。

「こっちの科白だよ、そいつら死んでない？」
「お、俺は悪くないよ！　こいつらが弱すぎただけで……！」
「犯罪者はみんなそう云うんだよー、さっきのそいつらも言ってたしね。とりあえず、詰め所にいこーか」

この国の『臭い飯』にも興味があるんだ。
尚も言い募る少年を引っ張って、俺はその場を後にした。
烏丸イソラはクールに去るぜッ！

シン・ウォルフォードと臭い飯

「――じゃあ、もうこんなところ来るんじゃないぞ。今日のところは見逃すけど、街中では攻撃魔法だって禁止なんだからな」
「……はい、どうもご迷惑おかけして、すみませんでした……」

てっきり国民かと思ってたのだが、どうやらこの少年、非国民であったらしい。
憲兵に説教されて、すっかり青菜に塩を振ったかの如く萎びた少年がトボトボと去っていった。
シン・ウォルフォードと云ったらしい少年の罪状は『過剰防衛』。
自分は悪くない、の一点張りだった彼だが、あのモヒカアンな方々へ少年が口にしたが如く、『女子供（弱いモノ）へ暴力を振るっては悪人である』ということを憲兵に合わせて説いて見せれば、渋々とだが頷くに至った。
例え悪かろうが、悪を悪と断じたまま潰せば、結局はより悪い先行きしか待ってないよ、ということも説いたのだけど、アレ多分理解してねぇな。
まあ、子供なんだし無理も無いか。

勧善懲悪はヒーロー的思考だから、子供心には憧れもあるだろうからね。
いやそれにしても、この国の刑法にその点が敷いてあって助かった。
これが帝国なら『貴族相手だと完全に無法』だから、少年へ説いた罪状に正当性が消失する可能性もあったからな。
少年兵雇用に抵触するような国際法までは敷かれているかも怪しいけど、この程度の刑事訴訟が通用する国家であったことはちょい安心だ。

さて彼の少年が非国民であった理由について。
どうにも、彼はこの国に来たばかりだったらしく、市民証を未だ預かっていなかったらしいのだ。
加えて、この国では知らぬ者が居ない『ウォルフォード姓』を名乗る。
もし短絡思考の憲兵だったら「も、もしやキミは賢者のお孫さん……!?」みたいなアンジャッシュ展開になっていた可能性もあったが、そんな英雄関係者だとしても身分証明証を持たずに街中をふらつくことはまず『在り得ない』。
姓名偽証と見做されちゃった少年であったが、初犯と、一応の正当防衛性があったことも相俟ってすぐに釈放という流れになった。
まあ、その辺口添えしたのは、その場にいた他でもない俺なんだけど。

だって少女たちはその場に置いてきちゃったからね。
被害者であるモヒカァンの人たちにも注意が必要、と思って担いできたわけだが、目を覚ました時と釈放された時に連れ立ったら少女らを引き離した意味が無い。
喧嘩両成敗。
ならば、その場に真っ当な被害者を絡めるのは悪手でしょうが。
口添えした時点で、自分でもなんだかマッチポンプ染みてるなぁ、とは思ったけれど。
まあ、悪いことをしてるわけじゃ無いんだし、ダイジョウブダイジョウブ！

「……さてと、学園の入学試験までまだ一カ月か。暇も潰せそうな国みたいだし、多少遊んで過ごしますかね」

■

「……スティーブさん、市民証、なるべく早くに用意してもらえます……？」
「……？　どういたしましたか、シン様。そんなにやつれて」
帰宅したウォルフォード少年は、かなり消耗していた。

森では魔物狩りにまで精を出した彼であったが、此処まで疲労を感じたのは覚えが無い。

感覚として、彼はそれを知っていたのだが、その根源的な正体を自覚するにまでは至っていなかった。

疑問はあったが、ウォルフォード邸の執事長を務めるスティーブは先に少年の問いへ答えを返す。

尊敬する英雄の孫であることは勿論だが、屋敷の主に連なる血筋に提言を求められて応えないことは、貴族としても無礼に値するのだ。

この国では貴族と平民の垣根が酷く弱いが、それでも敬意を抱くことに躊躇しては職務として在り得ない。

「申請はしてありますが、流石に英雄のお孫さんとはいえ優先を繰り上げるのは難しいかと思われますが……」

「あー……、まあ、お役所仕事ならそういうものだよね。いや良いよ、わかった。俺、暫く部屋で過ごす……」

「本当にどうしましたか。王都で、何かあったのですか?」

引きこもり宣言をされてしまっては、職務でなくとも心配になってくる。
それが理由在りきならば承諾するのだが、相手は都会を見たことが無いはずの少年だ。
空笑いで帰宅後、いきなりその選択なのだから、どうしたって何かが起こったのだと察してしまう。

「いや、街でちょっとね、憲兵に注意されちゃって……。俺、身分証も持ってなかったから、釈放にも時間かかっちゃってさ……」
「なんと……！　高名な英雄の血筋を、その兵士はなんだと思っているのですか……ッ!?」

其処を釈明できなかったからこその結果なのだが、スティーブの敬意が先立って見当違いな怒りが湧く。
そういう細かい点を気に掛けることが出来る少年ならば問題は無かったのだが、自己を『恰好付ける』少年心が未だに拭えない彼は自覚にまでは至っていなかった。

「わー！　待って待って！　俺が悪いんだから！　それに済んだ事だし！　もう気にし

てないし！」

「おお……！　流石は英雄のお孫殿……！　細やかな気配りも忘れないその配慮、私（わたくし）感服いたしますぞ……！」

放っておけば執事長が憲兵詰め所に突撃噛まそうかという憤り方だったことも諌めた理由に当たるのかもしれないが、それにしたって少年の言い分には大事な点が抜け落ちていた。

彼もまた、相手が悪かったとも思っていないことが救いなのだが。

シン・ウォルフォード。

彼はこの世界へ転生して来た、所謂一種の異世界転生者に値する。

生前は社会人で、『生きる理由』とやらに囚われるくらい『生き詰まって』いた。

終わらぬ残業に駆られて、趣味も友人も恋人も居ない、寂しい人生だったと自覚していた。

不幸ではない。

本人が言った最低限度ではあるが生活はできていたし、不満も湧かなかった。

それを受諾していたし、既知ともしていた。

単純に、本人が自己の殻に籠り過ぎてコミュニケーションに難を抱えセルフで完結しており、それ以上を望むことも、其処へ視点を傾けることも認知に不備があったというだけの、良く居る『人間失格』予備軍だ。

太宰治とかに喩えたが、己を高尚だと思い込んでいるだけの、何処にでもいる一般人のひとりであり、周囲への感謝も敬意も足りていない程度と性質の低迷が目立つ、有象無象の群れにも属せ無いアウトサイダーである。

こう書くと格好良いが、独り立ちする性質はどういう動物でも多少は抱える。

大事なのは独立したその後に、群れに頼らない生き方を整えて『己の群れ』を確立させる行動力で在り、群れの『中』に居ながらにして馴染めないことを言い募って陰に潜むのは結局、袋小路でしかない。

要するに一種の『人間失格』へと行き付くのである。話が進まない。

とりあえず、大人としての自意識を備えたままに、新しい人生を再出発させたのが彼である。

そのはずなのだが。

少年は、森で賢者に育てられたお蔭で、魔法に関しては類を見ないほどに伸びたが、常識を教えられていなかった、と周囲へ認識された。

普通に考えれば、在り得ない。
世界が違うとはいえ、『社会人』としての自意識が其処にはあったはずなのだ。
『違う世界』で『生きるため』に、世間との知識と経験の擦り合わせは『必須』なことである。
つまりは、彼が元来『そういう』自己完結型で、世間との折り合いを形成できない人格破綻者であった証明を助長するエピソードに値するのだろうが……。

擁護ではないが、人間は己に貼ったレッテルを革めることに難儀な生物である。
貼り付けたラベルを一度換えてしまえば、中身を検めない限りはそのレッテルは改められず、一度貼り付けられた感情や認識などの『感覚』で検められる『気持ち』は個人にとっての比重が非常に重く、独立独歩であるかのように別個として心の棚に据え置かれてしまうのだ。
それは宛ら『魂』のようなモノに近しく、別個に据えられたそれは、自身が自覚しない限りは再び検められることも無いままに放置されているわけだ。
『自覚』しなければ、人間は『其処』から脱却できない。
それが意識的だろうが無意識的だろうが、何某かの対外的影響を請けられれば、変革も果たせるかとは思う。

それを、ひとは成長とも呼ぶのである。

まあ、そういうわけで。

シン少年は、悪意感知や害意感知を知覚できる『索敵魔法』を意識的に張っている。

魔物を狩っていた経験から、と彼は述べるが、側面的な観点からすればそれは常に身構えている小心者の態度でしか無く、其処を擂り抜けるモノには通用しない。

今回はそれのお蔭で『害意の無い無自覚な悪意』という『善意』を、街で遭った浅黒い肌の少年から感知してしまっていた。

結果として、少年が出会うはずであった『運命の相手』との交流も叶わなかったわけだが……。

――それを把握できたものは、誰一人としてこの世界線には居なかった。

転生者ではない男

世界は、一巡した――。

驚くべきは錬金術記号ドラゴンとなんちゃって邪神群がコンビを結成したこと、その行動力に当たる。

両世界を繋いだ余波で魔力精製の法則が乱れ、俺が元の世界へ戻った時には一部を除いて時間軸が逆行していたのである。

合言葉も座標も無しに事を為してしまうたぁ、C―ムーンもびっくりだ。バランスブレイクもほどほどにしてよホントにもう。緑の赤子、カブトムシ、カブトムシ、カブトムシ……。

合言葉を忘れて神父がメイドインヘブンに突破できないことはさておいて。

俺がこの世界へ『堕とされた』のは、そういう事態を自覚したタイミングだった。

元より魔力精製を果たせる体質を備えていたから元の世界としてもイレギュラーだったこととか、山中に地殻変動で取り残された水棲人類（ダダゴン）がひょっこり現れるくらいにはピーキーな世界線だったこととか。

まああの世界としても『枠』が残っているだろうから、俺が放り出されたことには納得はいって無い。
ひょっとしたら記憶またはキャビネッセンスの転写だけで、『俺自身』本人ではない可能性もあるけど。
というか、この世界に墜ちた際が肉体ズタボロだったから。
其処から強制再生させたから大元とか多分関係無いな。
どうせアレだろ？
上位存在とかそういう現象とかが『不思議なことが起こった！』とかいう適当な理屈で異世界にブレイクインしちゃったんだろ？
よくあるよくある。
異世界転生って、もうありふれてるよねー。

最初は、魔法がイメージと魔力だけでめっさ単純に稼働してるもんだから慌てたけどな。
え、こんな簡単にやっちゃうの、大丈夫？　そんな感じの、単純すぎる法則無視。
宇宙の法則が乱れてる！　これ多分ダメな奴だ！
魔法世界みたいに幻想生物とかが居るわけでも無い、普通に知的生物が人間だけの世

界でこうなるって、でも外側へ脱出が難しい。
所謂『檻』みたいな世界だな。
『地獄』とも云う。超最低。

まあなんであれ、生まれたからには生きるしかない。
元の世界を目指すことは一端置いて、せめて人間らしい生活基盤目指そうかな、と旅をしていたわけである。
旅で話を聞くうちに、結構裕福な国がアールスハイドだということを知った。
彼ら自身に自覚があるかは怪しいが、この世界の主導と先進を先頭になって牽引していこう、という代表国家。
この世界の『基準』はこの国に当たるし、他の国も『人格者』的な国色を敬っている節が見当たられる。
だからこそなのか、この国は自分たちの蓄えた知識や知恵や技術を晒すことに抵抗が無く、また率先して諸外国との提携や連携を宛てにしている節がある。
国内に間諜の目が見当たらなかったのも、恐らくはそういう理由だ。
お隣の帝国なんかでは、貧しい国民に紛れて腹に逸物抱えていそうな秘密警察みたいなブラックな視線をよく感じたのだが。

それを国家上層がキチンと扱えているのかはさておいて。

ともあれ、色々と見て回った結果、アールスハイドは外国からての人材確保にも抵抗の無い国柄だったことが判明したので、俺もまた乗っかってやろうかという算段である。

乗るか反るかで云ったら乗るしか無いでしょう、いつやるの？　今でしょう、このｂｉｇなウェーブにＹＯ！

「へぇ。マリーカさんは賢者様のところでメイドを」

「んっ、あっ、はぁん……っ、ええ……。おふたりと、そのお孫さんであるシン様に、仕えていますわ……んぁっ」

艶の乗った声音で、借りた部屋に連れ込んだ女性が腕の中で囀る。

所謂ピロートークという奴で、取り留めのない会話の中で、多少に順当に仲良くなって往けば、続ける会話には彼女自身の事柄が増えていた。

若干情報規制が必要そうな内容ではあるけれど、そういう部分を指摘することは『共感』の手段としては悪手。

呼吸の隙間が喘ぎ声に換わる前に、『理解できる』と言葉を滑らせた。

「それは大変そうだな。英雄の家族とか、仕事として誇らしいのは確かだけど」

「ええ……、っぁ、私自身……、もういい歳ですし……、ご満足いただけているかどうか……、ぁんっ」

「いやいや、マリーカさんならまだまだ現役だよ。全然若いじゃないか」

「ふふ、こんなおばさんをからかって、いけない子ですね……」

木窓で遮ったお蔭で部屋中に籠もった熱と、境界線すら失くしそうに隙間なく重なった肌と肌の繋がり、そして絶え間無いように続く全身運動が、自分でも何を口走っているのかを自覚できなくなっているだろう。

勿論、こちらからも色々と情報は投げている。

そういう遣り取りを繰り返すことで『信頼』は生じ、相互的に対等な関係であることを刷り込むのである。

彼女を『誘った』のは俺からだが、彼女自身、街中へは何某かの情報収集に赴いてきた気配があった。

推測するに、件の『賢者』の家族に関する事件の調査なのかも知れない。

王都で人伝に『聞き込み』の真似事のようなことを執っていたので、失敗前提で売春に似たような誘い文句で連れ込んでみた。情報屋の一種だと誇張も交えて。
これでもっと年若ければ『若さ』の価値観から断られていたのだろうけど、見え隠れしていた『使命感』のような部分を擽れば結構簡単に釣れてくれた。
其処が『賢者』の事情に携わる者としての、矜持に繋がっているのであろう。
美味しく頂ければどうでもいいが。

ちなみにこの国は貴族と平民との垣根が低い。
彼の賢者本人が平民の出で、貴族位も取得しようとしていないこと。
更には過去に貴族絡みで起こったらしい『魔人』の何某か。
そういういろんな要素が絡んだ結果、そういう情勢へと傾いたらしい。
他国からの移民などでも受け入れているのも、その辺りの風潮の影響かもしれない。

本人の言葉の通り、マリーカさんは目元の小じわなんかから割出すと、『いい歳』と読んでも差し支えは無さそうな年頃ではある。
３０～４０手前くらいか。
この世界がよくある中世ヨーロッパ的世界水準に准えると、１０代後半には結婚して

子供を産むのが『普通』に計算できるのだが。

聞く話によると、世間的に成人と見做されるのが１５だ。

なのだがこの国の場合、中等部の卒業後に高等学院へ進学するのがメジャー（正しくは若者の目標。または国勢の指標）にもなってきており、在学中に結婚するのはやはり『多少早い』という認識にもなっているらしい。

若者の成人化離れか。日本か。

となっても、遅くとも２０前後で子を産むのが妥当だとして、マリーカさんくらいなら産んだ子が成人していても可笑しくない辺り。

下手をすれば孫が居ても可笑しくない年頃で、だからこそ『性的需要の絡まない使用人』として賢者家族の下へ雇用されたのだろう。

『おばさん』というのも自己評価だが、女性はいつだって若く在りたいもの。

本人がむしろ『おばあちゃん』と認識していてそれでも『若い』と鯖読みを口遊んでも、それを寄り上方向へ評価をスライドさせるのが女性にモテるコツである。

下手なホスト野郎みたーい（笑）

いやしかし。

俺の肉体的には成人すぐくらいなのだが、其れを差し引いてもマリーカさんは充分に魅力的だ。

肌は小奇麗でシミひとつ目立たないし、やや垂れかけだが揉むと張りのある乳房はしっとりと柔らかい。
むしろ充分な大きさがあるからこそ垂れているので、その上で余り使い込まれてい無さそうな敏感さに艶やかさが合わさってサイキョーに見える。
うねるように絞る膣の具合も丁度良く、後ろから獣のように突き上げた時の尻肉のたわみ具合など精を尚も昂らせるほどに至高的で官能的である。
これは一晩だけで済むかもわかりませんね。

「からかってなんかいないさ。……なぁマリーカさん、職務時間に余裕があるのなら、もうちょっとお相手、頼めない？」
「あ……ん、ふふ……、ええ、お好きなだけどうぞ……♡」

本人に間諜紛いの役割を執っている自覚があるのかどうかはどうでも良い。
どちらがどちらの罠に嵌まったのか、という裏を読むことも、勘繰るほどのことでもない。
ただ今は、良く熟れた身体を持て余した女性が、恋を知らなかった少女のように雄の身体を求める姿を。

情欲を迸らせて、嬌声を歌声のように朗々と上げ続ける様を。
貼り付くほどの特等席で、頭付(かぶり)きで堪能させて戴く。
ただ、それだけである。

気になる男とゴールデンクラッシャー

「うーん……、いないなぁ……」
「？　どうかしたのか、シン？　誰を探してるんだ？」

入学試験終了後、まばらに帰宅していく受験生らを見回していると、丁度試験が終わったのか、出て来たオーグに声を掛けられた。
あ、こいつはこの国の王子様ね。
本名はアウグストなんとか、だったけれど、長いからオーグで良い。本人もそう言ってたし。

「いや、同じくらいだったから、ひょっとしたら此処に来てるかと思ってたんだけどな」
「ふむ？　なるほど、女か」
「いや、ちげーよ！」

女の子の知り合いなんて、こっちに来て直ぐに引き籠った俺にできるわけないじゃん

！

スレ違った子くらいなら居たけど、その後が続かなかったから顔見知りにもなれてないしな！

「なら男か。そういう趣味だったのか、お前……」

「趣味とか言うな……！　男なのは合ってるけど、そういう感じじゃねーよ」

ディスおじさんの息子なので、俺からしたら会っていなかった従兄みたいな感じだ。

王子だとか殿下だとか、そういう堅苦しい肩書を本人も好んでいないらしく、漫才の掛け合いみたいに気兼ねの無い会話で俺たちは連れ立って歩いた。

「もう探さなくて良いのか？」

「目立つ外見だったから、人ごみの中でもけっこう見つけやすいんだ。此処に居ないってことは、騎士養成学校の方に進学したのかもな」

探知魔法で探ったのも理由にある。

其処に居るのに居ない、みたいな、目立つ外見とは裏腹に隠れるのが上手い印象が

あったから、これに引っ掛からないのなら本当に此処に居ないのだろう、ってことがわかるんだ。

そこまで詳しくは言わなかったけど、オーグは俺の言葉で気になったらしい。

「その『どちらか』というと、そいつは強いのか……？」

「そうだな。体術がすげーし、魔法を使ってないのに身体強化したみたいな動きしてたんだ。アレで一般人だ、なんて言ったら、俺なんて可愛い方じゃねーの？」

「それはない。無いが、気にはなるな……」

否定が早すぎるぞお前……！

「もうやめてください！」

「オ、っごぉ……!?」

と、俺が口にする前に、女の子の叫び声が響いていた。

慌てて振り向けば、

「……えーと、アレって、さっきの……カートくん、だっけ？」
「カート＝フォン＝リッツバーグ、だな……」

ああ、それそれ、その子。
試験前、凄い自信満々で俺に絡んできていたカートくん。
そいつが、股間を抑えて蹲っている姿が目に映っていた。
……ええと、ひょっとしてアレは……。

「私は貴方の婚約者なんかにはなりません！　これ以上関わってこないでください！」
「マ。……、まて、ししりぃ……！」
「失礼します！」

うん、あの声の震えよう、間違いが無いな。
カートくん……、あの女の子に股間を潰されたのか……！

「なんって恐ろしい真似をするんだ……！　この国の女の子って、アレがデフォルトなのか……!?」

「い、いや、そんなのばかりではない、ぞ……？」

目を合わせて言ってくれ……！

俺、この先の学園生活に不安しかないぞ……!?

■

「うわー……、吹っ切れたわねぇ……」

ドン引きの表情で、マリア＝フォン＝メッシーナは友人の執った行動を評価した。

シシリー＝フォン＝クロードがカート＝フォン＝リッツバーグに言い寄られていたことは以前から既知であったので、それにようやくはっきりとした拒絶を顕わとしたのだと、むしろ好意的に捉えている。

ただ、僅かばかり意外には思っている。

幼馴染でもあるシシリーは周囲で起こる事柄に対しては受け身なばかりで、自分からああした行動を執ることがなかった。

その変化があまりにも唐突に見えたがために、マリアはこの表情を表すしかなかっ

た。

「これって、やっぱりあの時の子が関わって……いるわよね、やっぱり……」

なんとなく、その変化の理由に思い当たったマリアは、誰にともなく独り言ちる。

シシリーが取った行動は、一カ月前に彼女たちを助けてくれた少年の、片方が残した助言そのままであったのだから。

「成長、成長って言って良いのかしら……。とにかく、自分で率先して行動に移してくれるようになったことは悪いことではないけれど……、其処に行き付いた理由が、どうにもね……」

なんとなく、本当になんとなくだが、マリアはあの時の少年に対して、シシリーが何らかの感情を抱いているのでは、と推察していた。

事実、行動に移していたのだから、それが影響を受けていないとは言い切れない。

問題なのは、これが何某かの恋愛感情に置き換わっているかどうか、という点なのだが。

「……ま、其処はせめて、もういちど会えたら、ってことよね。この学院を受験しているとは思えないけど」

呟くように言葉を締めて、マリアはシシリーの後を追う。

詳しい部分までは理解していなかったが、魔力を使った素振りも無しに、あれだけの身体能力に体幹を備えていた人物を、魔導士系譜だとはマリアも想定していなかった。

シンもそうだが、魔法学院を受験する彼らは総じて魔力の察知能力に敏感になっている。

寄り明確にするなら、この世界全体がそうして魔力を察することに優れているようにも伺える。

街中で魔法を使えば誰でも察せるし、高位の使い手が探索魔法を使っていることに拙い相手でも気づけるし、魔力波形を記録して魔物討伐の累計を取ることにも融通が利く。

だからこそ、彼らは魔力制御に重点を置かず、安易に結果に繋がる魔法を、原理も把握せずに使用するのだろう。

だからこそ、あの時の色黒白髪が魔力を隠蔽していたことには、誰一人として気づいていなかった。

それより以前に、王都に隠れ潜んでいるオリバー・シュトロームが、洗脳魔法を使いカートを『改造』していた事実にも。

――そしてこの事件以降、シシリー・フォン・クロードの名は魔法学院に畏怖と共に拡散して逝くこととなる。

彼の【黄金砕き】が、誕生した瞬間である――。

――喝采せよ!!!!

■

「それでは、今年の『入試主席』は、シン＝ウォルフォードくん、ということで」

試験終了後、集まって会議を開いていた魔法学院の教師たちが、『賢者の孫』の規格外さに呆れるやら感嘆するやらといった感じで、実技試験の結果を纏めていた。

自分たちの立つ瀬が無いが、入学する彼の立場、むしろ正確には背後関係から、魔法

学院に入学する意義が見当たらなくとも、受け入れることに拒みはしない、とひとつの収束を見出していたところだ。

むしろ常識を学びに来たのだから、逆説的に初等科または中等部に放り込むことが正解なのだろうが……。

……彼が『成人』に成ってしまったので、そのことには誰も気づけない。

掘り下げれば、『背後関係』から其処を突くことを憚られて黙殺されたとも取れるが……。

詳しいことは察しちゃいけない、イイネ？

さておいて、ひとつの事柄を取りまとめたところで、教師のひとりが手を挙げた。

「ところで、実技の規格外というと『もうひとり』居るのですが……」

「え？　そんな子、いましたっけ？」

実技担当の試験官が疑問の声を上げる。

手を挙げた教師は、手元の資料を見ながら言葉を続けた。

「いえ、正確には外部からの伝達です。シンくんほどの破壊性能は顕わとはしてなかっ

たようですが、無詠唱で、『的のみ』を一瞬にして粉砕したそうです。この目で見ていなければ眉唾ものですが……」

「……それ、制御力がシンくんを超えていないか……？」

たった今、『自分たちの手に負えない』と知らしめられた少年を、更に凌駕していそうな人材が。

そんな目を覆いたくなるような報告に、誰もが目を逸らした。

それを現実逃避と、人は言う。

「……何処から報告が入ったんです……？　外部というと、騎士養成士官学院ですか……？」

「宮廷魔術師採用試験とかじゃないのか……？」

「いえ、高等経法学院です」

予想外過ぎる報告に、誰もが安堵の息を吐いた。

「なんだ……、あそこですか」

「魔法を重要視していない高等学院じゃないですか。王国が魔法主義だから、今でも実技として魔法試験を通用させている、っていう話の」
「じゃあこっちとは試験内容にも変化が出ているかもな。的までの距離が短い、とか」
「えーと……、じゃあ、見送りで良いですかね。本物の実力者だとしたら、編入生として囲い込む必要もあったかと思われたのですが……」
「ああ、問題ないでしょう」
「王国の三大高等学院に名を連ねているから『自分たちにも引けを取らない実力者も此処にいる』とでも言いたげなアピールなのでは？」
「まったく、頭でっかちはやり方が姑息ですな」

そういうこととなった。
そんなわけで、彼の手元にある【オブシディアス・ヴァヴランテ】の名前は早々に記憶から薄れて往く。
またひとつ、這い拠ったことに誰もが気づいていなかった。

カート・フォン・リッツバーグとオリバー・シュトローム

――リッツバーグ邸を後にしたオリバー・シュトロームは、ただ静かに去って行く。
王都内にある貴族や富裕層が通う中等部学院を目指す足取りは、迷うことなく闊達としている。
其処にある研究室を兼ねて彼に預けられている自室へと戻ろうとしている、帰宅の足行きだ。
その表情は、硬い。
両眼を覆う眼帯のために気付かれ難いが、口元は引き結んだように閉じられていた。
心情は、決して愉快ではない状況に陥っているのだと推測される。
事実、シュトロームは現在、焦燥にも似た感情に苛まれていた。
喩えるならば、泥地に足を取られたかのような不安。
それが泥地程度ならば何も問題は無い。
踏み込むことを避ければ良い話だし、踏み込んだところで足元が汚れる程度で済むからだ。
だが、この感触を『その程度』で済ませられる程、シュトロームの危機意識は鈍って

はいない。
――泥地に見せかけた底なし沼――。
彼の危機感が『その先』に感じ取ったイメージは、まさに『それ』であったのだから。
話は、彼が家庭教師を請け負っているリッツバーグ邸にて。
高等魔法学院の受験を終え、帰宅したカートと最後に会話した時点に遡る。
ほわんほわんほわ～ん、しゅとろむ～。

『――お帰りなさいカートくん、入学試験の調子はどうでした、か……？　どうしました？　元気が無さそうですが……？』
『先生……、僕は……』
『（……『僕』？）』
『僕は自分が情けないッッッ！』
『!?』
『女の子を力づくで無理矢理自分に傅かせようだなんて、貴族としてあるまじき行為です！　それが惚れた相手なら猶更だ！　僕はなんて馬鹿な真似をしてしまったんだ!!』
『か、カートくん、キミ、いったいどうしｔ』
『ええ、どうかしていましたよ僕は！　例え誰が赦そうが、僕が働いてしまった行為は拭

う事なんてできやしない！　高等学院に受かったとしても、それで無かったことにできるようなヌルい罪では無いんです！』

『え、いや、そんなことｈ』

『なので！　僕は此れから謝罪行脚の旅に出ます！　王都中を渡り歩いて！　僕が迷惑をかけて来た今までの方々へ頭を下げて回ってきます！　あっ、受験は滞りなく済ませました。これも全てシュトローム先生のお陰です』

……そう言い残して、彼は旅立っていった。

用事のあった本人が颯爽と不在になったままで、何時までもリッツバーグ邸で彼を待つわけにもいかなかった。

シュトロームは引き攣った笑顔を顕わとする伯爵夫人に言葉を残し、そそくさと去ってきたわけである。

一種の現実逃避、責任逃れとも取れるが。

在り方としては、雪山の山荘で犯罪者の影に怯える複数人の中に紛れることを善しとせずに自室へ引き籠る第二の被害者的な立ち位置にも酷似して見える。

こんなところに居られるか！　俺は帰らせてもらうぞッ！

自分が何かの嫌疑を掛けられたわけでも無かったが、とりあえず居心地は悪かったの

で足早になったのも到仕方がない。
最後のカートの表情は澄み切った空のように晴れ晴れとしていたが、だからこそ、シュトロームは冒頭の不安に苛まれていた。

「(……洗脳前の人格とは似ても似つかないモノですが、私の洗脳魔法が洗い流されていたことは事実でしたね……)」

そう。
オリバー・シュトロームにとって、カートは体の良い実験動物だ。
人間を魔物へと換える、臨床実験の被験体。
この世界では全ての生き物が魔力を持ち、それぞれがそれぞれの裁量で使い生きることに役立てている。
魔物とは、何らかの要素によって個の扱える容量を超えて魔力を飽和させてしまった動物らのことであり、そうして変化したモノを指す言葉だ。
そして、それは人間でも例外では無い。
その地点に至ってしまったモノは『魔人』と呼ばれた。
かつての『魔人』は理性も無く暴走し、甚大な被害を世界へ齎し、彼の英雄『賢者』マー

リンの手によって討伐されたのである。
シュトロームは過去の『ある事件』によって魔人へと変わった、発現当初はさておき現在は平穏に隠れ潜むことを可能としている『理性ある魔人』だ。
偶発的な要素によって魔人へと換わった彼は、なんとかそれを究明できやしないかと研究に明け暮れていた。
――それは、人間を脱却してしまった己の同輩（はらから）を欲した為であろう。
己を換えた過去の事件、その全ての主犯であり原因である帝国に敵意を抱き、それを許容する人類を見限ったと口では述べる。
だが、その『復讐』は彼が『どうでもいい』と断じている『人間』に拘っているからこそ、地続きとなっている感情の延長線上でも在る。
己が変じてしまった『事件（原因）』の一助に、己もまた『なっていた』ことを許していないからこそ残る、人間であった頃の『残滓』こそが、今の彼の『主体』なのである。
「（記録にも残されてはいませんが、感情と魔力にはなんらかの相互性がある。その点を注視して『感情を飽和させる』心算で魔力を注ぎ続けてきたというのに、それすらも払しょくされているとは……）」

シュトロームの読みは『正しい』。
後々になっての話であるが、シン・ウォルフォードもこの世界の魔法は『心』に反応してより強く実現する、と解釈している。
其処から『あと一歩』を踏み込むと、つまりは以下の通りに説明できる。
あやふやなイメージ（想像）でも明確な実像（リアリティ）を容易く顕現させる、この世界の【魔法】はかなり『大雑把』で『気前が良い』。
そして其処には生物特有の『意志』こそが引き金となっており、無生物には魔力が宿らない、とされている。
魔石という例外もあるが。
意志とは思考の先端であり、思考とは生物が『生きること』の根源に当たる『欲求』から派生する。
感情と欲求は思考するモノには割いて別個にすることのできない表裏なのだ。
だからこそ、感情と魔力は相互関係にあり、人間こそが最も上手く魔法を扱えている。
――様に伺えるのである。
実際、過去に出現した魔人も、シュトロームの魔人化も、彼らが己の絶望または怒り（感情）を飽和させたことを発端としている。
要するに、感情の負の方向への暴走の結果こそが『魔人化』である。

――と、其処までは踏み込めなかったのが、シンだったのであるが。

シュトローム自身の云う『洗脳』は、彼が魔物を形成する時と同様、カートへ膨大な魔力を注ぐことを主体としていた。

それを本人や周囲に気付かれないように気を張る必要があったが、僅かずつにだが、確実に破綻するようにと。

カートの扱える魔力許容量を溢れさせることを目的として、その過程で『帝国貴族のように』横柄で尊大な人格へ矯正を施してきたのである。

其処には『愚か者こそが最も動かし易い』という、帝国的な政策に最も似通った理屈があった。

無論、元の人格として方向性が似通っていたからこそ取られた方式で在り、適さないモノには通じることも無い。

手段としては酷く拙く、手間も時間もかかる迂遠な『教育』の一側面としか言いようの無い手管でしかなかったのだが、アプローチの方法としては決して間違いでは無かったのである。

問題は、その結果が出る前に実験が取り止められたことにこそあるのだが。

「……何処の誰かは知りませんが、私の実験を未然に防ぐとは、面白い真似をしてくれますねぇ……」

深めていた智謀の溝から這い出したのか、歩みを緩めたシュトロームは口の端を吊り上げた。

愉悦に似た感情へと引き戻されたのは、自身の対抗馬が頭角を現してきたと推測した、先達としての優越感。

自然と口に漏れ出た独り言は誰にも届いてはいないが、誰に聴かれていようと気にもかけないのだろう。

未知や壁などの触れ得ざる障害に足を停められた時、彼は高揚感を覚える性分なのだ。

それは魔人と化す以前から抱いていた、研究者としての本領から微塵も逸脱していなかった。

「噂に聞く賢者や導師か、はたまたまだ見ぬ英雄か……！　良いでしょう、まだ時間もあります。今は黙しますが、果たして私の策とどちらが適うのが先でしょうかねぇ……!?」

所詮カートの魔人化は時間潰し序での実験であった。
時間をかける一方で、彼は別の策を、既に足元まで積み上げてある。
未だ見ない好敵手に、シュトロームは高らかにフフフ、フハハ、フゥーッハッハッハァーッ!! と三段笑いを王都へ響かせた。
流石に不審者である。擁護できない。

――なお、カートくんの洗脳が解けたのは、入試帰りに道端で股間を抑えて蹲っていたカートくんを見兼ねたどこぞの色黒白髪が治療魔法をホホイと施し、その序でに過剰魔力が漂っていた部分をブレインウォッシュされた程度で、実験の妨害なんかは微塵も考慮されていなかったりする。
カートくんの人格が豹変したように見えたのも、彼自身が『洗脳』の字面通りの意味で冷や水を被せられたように冷静になれて己自身の身の振りを省みたからこそなった経緯で在るので――。
要するに、誰も策など弄していなかったわけなのだが、それは言っても栓の無い話であるのだろう。どっとはらい。

カート・フォン・リッツバーグと入学式

緑色を主体とした制服を着た少年少女らが、群れたり離れたりと思い思いの距離感で足を運ぶ。

それぞれの表情は制服とは違って様々に彩られていた。

一様に高揚としているかと思っていたが、入学式では何か薫陶のようなモノでも与えられたのだろうか。

何処かに、危機感にも似た緊張感を抱いた顔つきが割合の多いのを、カートは訝しんでいた。

彼ら彼女らが足を向けるのは一向に同じ方向。

誰もがカートが待機している校門へ向かってくる。

この場は高等経法学院の校門前で、彼らは入学式を終えて帰宅に向かっているのだろうから当たり前の話だ。

だが、その表情に高等学院に此れから通うのだ、という優越感のようなモノが見当たらない。

何処かに作為めいた嫌な予感を思いながらも、カートは待ち人の姿を群衆の中に探し

ていた。

「あれ？　キミは……」

得てして、待ち人は早々に姿を現した。

浅黒い肌の、白い髪をした少年だ。

世が世なら何処の贋作使いですかー？　と訝しがられることだろうが、誰かと云うとプラチナブロンド碧眼お嬢様が率いる武器商人集団に所属する少年兵辺りに容姿は似ている。

糺し、こちらは結構表情筋が緩い。

カートの姿をその視界に捉えると、へらりと軽薄に微笑んで彼の近くまでゆったりと歩み寄った。

「やあ。その後、御加減如何？」

「問題ない。あの時は失礼したな」

長年の友人同士であるかのように、気楽に気軽に、ふたりは挨拶を交わす。

そんな近い関係でも無いのだが、カートには自然と居丈高には接せられない過程があった。

其処を咎められない気負いが、その態度を受諾することを拒ませることは無かった。

何が切っ掛けかと云えば、カートが某シシリー嬢に金的で迎撃されたのを、通りすがりの彼が治療魔法で応急処置を施した所縁である。

どちらも事情は把握していないが、『対処法』を教え込んだのがこの浅黒白髪なので一種のマッチポンプにも似ている。

誰が暴露とかも特に無いが。

「名乗りが遅れたが、カート・フォン・リッツバーグだ。通りがかりに治療をしていただいて、感謝を」

「どういたしまして。オブシディアス・ヴァヴランテです。オブシーって呼んでね」

語尾にハートマークでも乗っけるか、とでも言いたげな軽挙っぷりだ。

しかし、それでもカートは諌めようとはしなかった。

この辺りは彼自身の態度が主な原因なのだが、カートの周囲にはこういうタイプの友人が不在だった。

そもそも遡るならば友人の陰が見当たらないのだが、彼が横柄で傲慢な態度を取っていた過程(かって)でその辺りの事情はお察しである。

そんな折にふらりと現れた、近づかれたことも無い類型の人間性。

稀有にもアウグスト・フォン・アーデルハイドの感じるところのシン・ウォルフォードに対する感情に似通ってしまっているわけだが、そんなことも彼には知られぬことである。

どちらかといえばお腐り遊ばせられておらっしゃる婦女子の方々には垂涎的なシチュエーションかと思われる。が、それは作者にとってもあずかり知らぬ話。いやマジで。

「ん？　リッツバーグ、ということは財務大臣のリッツバーグ伯爵？」

「気づいたか。まあ、息子だ。ああ、直接会うわけじゃないだろうから、気にしなくていい。僕は今は未だ一介の学生に過ぎないからな」

一カ月前の入試でシンに突っかかって逝った張本人(当て馬)とは思えない人格改善っぷりである。

これを『キレイなカート』と仮に名付けよう。

「キミは、言っては何だが目立つからな。そういう『誰か』が姿を見せた場所を伺ったら、此処に辿り着いた。まさか経法学院とは思いも寄らなかったが……」

王国民ばかりの中に異国的な風貌の彼が混じっていれば、否が応でも目立つ。

カートはそれが判っていたから、彼を探す場所を換えたりはしなかった。

「まあ、経済と法律関係なら財務大臣なんかはまさに打って付けだろうからねぇ、いわゆる一種のホームって奴で。こんな一介の学生の噂まで聴こえているとは、普通に驚愕だけれども」

「自らの役職に繋がるのだから、些細なことでも取り扱うことは間違いでは無い。本当は、僕も此処に通っていたんだろうがな」

財務大臣の息子ならば、将来を見越して頭脳面を育むことが正道だ。

しかし彼の今着ている制服は青を基調とする魔法学院のモノ。

王国ないし、世界で重要視されているのが魔法そのものなので、むしろ魔法について学ぶ姿勢は異端と見做されるモノでも無い。

しかしカートの言い分に烏m間違えたオブシディアスは疑問を抱き、それをそのまま投げつけた。

「そう云うなら、なんで魔法学院に？」

「……実は、好きな女子がそちらに進学することを知ってしまってな」

「やだ、甘酸っぱい……っ！」

思わず画風は少女漫画へ変貌し、祈るように合わせた両手は口元を隠す。

瞳のハイライトにはトゥインクルが煌めいた。

オブシーこういう話大っ好き！

「まあ、その女子には振られてしまったわけだが……」

「やだ、せつない……っ！」

憐憫の視線が思わず向いた。

彼の知らぬことだが割と自業自得な部分が多いので、別段憐れむことでもないのだが、彼の知らぬことなのでそれこそ話は其処から進まない。

大事なことなので言葉は重ねた。

「……まあ、そのことは、もういいのさ。僕が独り善がりを働いていた、ただそれだけだ。クラスも離れたからな、もう逢うことも無い」

「それでも同じ学院じゃないですかぁ～、あぁ～せつない！　せつないはなしだぁ～！」

「……キミくらい明け透けだと、あっちの方はマシにも見えてくるな……。いや、異国民ということで話は通るか、キミの場合は……」

同年代の恋愛シチュに餓えてでも居たのか、カァー甘酸っぺぇー！と見悶える烏丸じゃなくてオブシー。

それを睥睨するように眺めて、カートは学院で遭った『非常識』を思い出す。

態度に気になったオブシーが問えば、回想のように彼は語るのであった。

ほわんほわんほわ～ん、ｒｉｔｚｂｅｒｇ！

■

「ウォルフォードくん、少し良いか」

「っ、うぉっ!? あ、ああ、大丈夫、えーと、カートくん、だよな……?」

入学式から少し経ち、クラス内での自己紹介を経由しての直後の話だ。

選考されて分けられた特別クラス、『Sクラス』から出た直後、シンは待っていた人物に呼び止められた。

受諾できたのは出会い頭だったこともあるが、それほども無理をさせようとする雰囲気を感じなかったためだ。

これが横柄な態度であれば、入試以前にそうしたように言い分を無視していたのであろう。

だが、改めて誰何したその人物は、『その時』と同一でありながらも様相の平穏な、要するに完全に一変した態度での交流であったのだ。

相手を以前より既知としていたシンは思わず確認を取り、失礼と自覚の無いままに交流を図る。

クラス内で幾許かの交流の後、じゃあ『孫』の家族である賢者様や導師様にご挨拶でも、という完全に物見遊山の気持ちだったクラスメイトを連れていたのだが。

「それで合っている。僕はカート・フォン・リッツバーグだ、改めて挨拶を、と思ってな」

「あ、ああ、シン・ウォルフォード、です」

相手の出方が『以前』と違い過ぎるためだろう、シンはその雰囲気に完全に呑まれていた。

喩えるならば一般の新卒社会人が何の心構えも無いままに、自分の身の振りを好きに出来る立場の会社役員に面通しを受けたかのような。

シンが感じた感覚を言葉にすれば、まさにその通りに当たる。

彼自身は自覚できていなかったが、緊張の前兆に直面した時の感覚を前にして、シンは自然と言葉遣いを正していた。

その感覚は、自身の通った主席挨拶時には受けられなかった代物だ。

「以前は済まなかったな、身分を笠に着て良い場所では無かった。その時の謝罪も済ませていなかったので、改めて顔を覗かせたのだ、許してくれ」

そうして緊張し切る寸前のタイミングで、カートはキレイに腰を折った。

直立のまま、頭を下げた略式のだがしっかりとした謝罪だ。

土下座のように大袈裟では無い分、『それ』に込められている一種の恐喝にも似た無意

図も無い。

まさしく正しく礼を負った謝罪をしっかりと正面に据えられて、しかしてシンは気が抜けた。

「へぇッ？」

人間関係、正しくは友人関係を、良好にも拙くにも築けて来れなかったのが彼だ。

それは生前に於いては元より、現在に於いても未だに熟せていない。

彼を見守ってきた者も多数居たが、それに応えようという気を持ちながらも、彼は未だ其処に『信頼』を置き切れないままでいる。

そして、その感覚は彼自身が己の人生を荒唐無稽だと自覚していて、尚且つ『この世界』が『未熟だ』と下に見ているからこそ達成させられることは無い。

だからこそ、正面から謝罪を説かれて、それをどう対処すれば良いのかなどと。

彼に其処を『思考せず』に応じられる経験など、無いのである。

カート・フォン・リッツバーグとシン・ウォルフォード

「――頭を上げろ、カート＝フォン＝リッツバーグ。そんな昔の事なんぞ、シンが覚えているわけが無い」
「――いやおい!?　それって失礼じゃね!?」

アウグストのこの揶揄うような口添えは、シンにとっては助け船になっていた。
シン自身は、其処に直ぐに気づけなかったが。

「……殿下、それはウォルフォードくんに対しても失礼では」
「おうその通りだよ！　オーグ、今真面目な場面なんだから、遊ぶのは後でな」
「遊びではないだろう」

シン自身、『これ』を粗雑に扱うことを許されないと、意識していないままに自覚はしていた。
だが、礼節が足りていない、常識の無い彼には、その辺りを上手く乗り切る手管（スキル）が無

い。

ゲームのような異世界だが、ゲームのようには出来ていないのが『現実』という奴である。

一朝一夕でスキルを身に付けられないからこそ、シンは誰かに『頼る』ことを自覚しなければならない。

それこそが、彼が得られない『信頼』へ行き付くための、踏み出す一歩目足り得るのだ。

この場の誰もが自覚できていない事柄なのだが。

「遊びでこんなことは言わない。あの時起こった事件は、事件にならずに立ち消えた、学生同士の他愛のないいざこざ程度の話だったのだ。賢者の孫が、いちいち覚えているほどのことでもなかった。私はそう言いたかっただけさ」

「んっ!?」

お前は対処できないだろうが。

そう言いたかったアウグストだが、それこそシンのように明け透けにモノを言い過ぎることはできない。

シンに合わせて多少はフザケタ物言いに準じるが、カートのような四角定規にきっちりと態度を崩さない貴族然とした者相手では、それは却って悪手に至る。

以前ほど無礼なら、もっと気軽に粛清できたのに。

無意味に抱いていたように伺える敵愾心が解消している様子なのは良好ではあるが、却って扱いの難しい貴族に成長したらしい。

そういう内心を表に出さないままに、自分を『従兄のようだ』と距離を詰めていたシンを助けるべく口八丁を働かせる。

魔法の腕が賢者仕込みであろうが、貴族を相手にできるほどの手練手管（スキル）を備えてはいないだろうな、ということをアウグストは看破できていた。

だからこその口添えで、それは賢者への憧憬も添えられた僅かな救心性だ。

其処に親愛の情は未だ無い。

無いが、この面白生物をこの場で身動き取れなくさせるのはちょっと嫌だな、という遊び心も僅かにあった。

事実、揶揄われたのか真面目な対応なのか、判断の付いていない張本人（シン）がトンチキな表情を晒していた。そういうところだろう。

「……殿下がそう仰られるのならば、下がります」

言葉の意図も上手く伝わったのだろう。
折っていた腰を戻して、カートは姿勢を正す。
とりあえずは、これで事態は済んだ。
誰もがそう思ったが、

「しかし、先ほどの代表挨拶はいただけないぞ、ウォルフォードくん」
「うえっひぃ!?」
「陛下が執り成したから事も大事にならずに済んだものを、真面目な式の挨拶に冗談を咬ませるなどと。場が違えば式典に出席していた誰もを小馬鹿にしていた行為と見咎められかねなかった、其処は反省しているのか?」

至極真っ当なツッコミを入れられたので、誰もが二の句を告げられなかった。
場に居るアリス・コーナーは直後にシンヘフォローも入れていたが、それは彼女自身が子供の感覚を持ったままな為だ。
学院扱いとはいえ、彼ら彼女らは成人している。
其処を遊び気分で揶揄されたわけだから、普通はカートの言うように気を害されたと

捉えられても可笑しくない。
学生気分の延長としている者が大半になっていたからこそ、其処は誰もがシンを咎めなかったのか。
或いは、シンを『子供』と見做して咎めるほどのことでもない、と見捨てられていたのか。
真実は定かでは無いが、とりあえず。
フォローを入れたはずのアリスは、冷や汗を流しながら他人事のように目線を外していた。
気分は『同じく説教されるのも勘弁！』である。
無事乗り切ることを、願う。

■

「……と、まあそんなわけで。その後は、先ほど言った好きな女子にばったりと出くわしてな。キチンと反省できているかまでは、追及し切れなかった」
偶然にも、シンとアリスは逃げ切れた形になったのだろう。

出くわしたシシリーには、これまでに起こした態度への謝罪をキッチリと説いていたカートなのだったが、其処まではオブシディアスには告げない。

今回の本題は『魔法学院稀代のやらかし男・ウォルフォードくんっていったい誰ぞ?』なわけであるからして。

「ふうん、そりゃまた。随分な『恥知らず』な子だねぇ、賢孫」

「扱いがぞんざいすぎやしないか……!?」

下された評価は辛辣だった。

無理も無いが。

無理も無いが、カートからするとあまり悪し様に言う気も無かった。

無かったので、流石に直接会ったはずも無い（と思っている）相手が下方評価を下すのは、ちょっと見咎めざるを得なかった。

「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥、と云うのだけれども。件のお孫さんは聴く限りだと『聞かずにやっちゃう』タイプだろう? 事態を見て、自分でどうにかできると『思い込んで』やっちまう。そういうタイプと見た」

「ま、まあ、そう捉えられても可笑しくない、が……」

カートは目を逸らしながら言い縋ろうとする。

仮にも『尊敬する賢者』の孫なので、評価が低下することは避けたいのだ。

しかし彼自身、出会い頭で力尽くで退かそうとしていたとはいえ、反撃が体術行使の腕拉ぎである。

オブシーの言い分に間違いが見当たらず、解消の目途が一切立たなかった。

「間違えた、と恥を知ることは誰にでもある。其処を反省しないと、人間は『やりたくない失敗』を何度だって繰り返すものさ。言っちゃなんだけど、『恥知らず』ってのは反省を『できない』人間の事じゃない、『しない』人間のことをそう呼ぶしかなーいの」

「そんな人間じゃ、ないだろう……？」

良くは知らないが、カートはシンを擁護する。

だが、オブシディアスは聴いた話だけで推察できていた。

「『常識を知らない』って指摘されたか自覚したかで王都まで来たんだろう？　知らない

のなら前段階で知れる時間があっただろうさ。それを済ませられないのなら、やはり『そういう』人間なのじゃないかな。随分と楽観的にも伺える、説明書を読まずに遊具(ゲーム)を取り扱うかのようだぜ」

「遊び気分、と云いたいのか」

「若しくは、独善的なのかな。善意と読むと良好にも伺えるから、猶更厄介なんだけどねぇ」

善悪の差異は『何か絶対的な者に認められたから』そう『分けられている』わけでは無い。

善悪を区別するのは社会であり、社会というのは即ち『人の群れ』だ。

群れの都合で『大多数』を寄り優位に生かすために、群れの『不都合』を駆逐する最初のツールが善悪という倫理に備えられている。

群れにとって個人とは『居て当然』のモノでは無く、基本としては群れを維持するためにこそ行動してもらいたい分枝(パーツ)でしかない。

しかし、群れに対する不都合を個人が感じてしまえば、その群れに所属させ続けることは実質不可能であり、意識が反り合わないわけだから結果として『不幸』にしか至らなくなる。

『幸福』とは、個人の有せる最初の優位であり権利である。
その『幸福』を大多数に実感させるためにこそ、善悪という区分が最初に必要とされるわけである。
要するに、拠り良く意識の沿う者同士で纏まれば、群れそのものは上手くいく。
それが対外的にどうするか、とはまた別の話になってくるのだが、一先ずここまでにしておこう。

「本人見たわけじゃないからあんまし悪く言いたくないけどね。『独善』は要するに『独裁』だよ。判断基準が『自分』だからね、成功筋が『それだけ』に見えちゃう。視界が広いのなら問題は無いのだけど、それに『気付ける』かまでは誰にも保証できないのさ」
「……耳が痛いな」

自分も『そう』であったからこそ、カートは『その先』まで理解した。
『成功』に向かうことは誰でも選び得るものだが、その道筋を『どうするのか』までは結局自分が判断するしかないのだ。
カートの父親は財務大臣を務めており、カートもまたその家族であるから、その筋へ向かうことが期待されていた。

しかし、この国、というかこの世界では、魔法こそが最も目立つ、優秀さの証として目を引いている。

実際、魔道具作成者は優遇されるし、攻撃魔法も治癒魔法も、使えれば使えるほど生活には役立てるので、誰にとっても喜ばれる。

しかし、国の産業と生活の保障とは根幹を為す仕事である。

要するに経済と法律だ。

其処ばかりは魔法の威力は引き合いには出せず、差配のための頭脳を上手く扱える人材が数多く有ることこそが必要となってくる。

カートは『社会が』魔法を『そう』扱っているからこそ、その流れに乗って魔法学院へ進学した。

誰もが認める優秀さを支持する、自慢できる学院だ。

ひょっとすれば、父親はこれを快く思っていない気持ちが、僅かでもあったのではと勘繰ってしまう。

自分が魔法学院を目指した理由が理由だからこそ、カートは自責の念を今、抱くのである。

改めて言うが誰だお前。

「ふうん？　なんだか反省を促しちゃったようで申し訳ないねぇ。まあ、人の振り見て我が振り直せとも云うしね」
「言い得て妙な言葉だな……。ウォルフォードくんのことをとやかく言えない、キミが僕に敬語を使わないのも、そういう意図があるのだろう？」
「外聞はさておいて、学院は『平等な場所』でしょう？　そんな気はないさー」

何処か愉快気に、オブシディアスはカートへ嗤う。
貴族に対して敬いの気持ちを抱くことは、既に『当然』だとは思っていない。
実際、これから先はそういった『関係性』を解消して征くのだと、学院でもアウグストを始めとした多数の貴族が砕けた態度を取っていたのだ。
其処を今更、カート1人が覆そうとしたところで意味は無いだろう。
だが礼節は別だ。
それを蔑ろにすると云うのならば、猶更カートは強硬に立場を主張するように進言しなければならない。
それだけがせめてもの、自分が貴族に連なる者だという、父親への主張にも繋がるのだから。
告解にも似た感情を抱いて、カートは決意を新たにする。

そんな二人へ、経法学院から追いかけて来た講師が声を掛けていた。

「オッ、オブシディアスくん！　オブシディアス・ヴァヴランテくん！　キミに問いたいことがあるのだが！　キミが新入生代表挨拶で明らかにした、帝国の経済状況について！　陛下も交えて相談したいのだが!?」

「……いや、ちょっと待て」

お前も似たような大暴走してたのかい！

そんな感情を込めて、カートは色黒白髪へ胡乱な眼差しを向けていた。

なんだかんだと孫を酷評した男

「――つまり、帝国は自ら物価を下げている、と……！」
「ええ。原価投げ捨ててるような売り方で、特に首都の方が。これをどう読み解くのかは、とりあえずそちらへお任せします」

物価の下降によるデフレを経済用語で説明出来りゃ良いんだけど、この世界の文化水準って微妙に幼稚なところあるんだよなぁ。
でも危機意識を抱いてくれたのなら未だ救いようはあるか。
まあ、どういう形に転んだとしても、俺にはあんまり関係ないけど。
さらっと中学受験レベルの数式読解に、国政と歴史を紐解く程度の常識問題。
『難解な試験』と世間で謂われている三大高等学院の入学試験だが、世界そのものが科学的発展を伴っていないために、筆記で測れることは然程も無かった。
なので、「本当にこれで合ってるの？」と逆に問題を読み返すことを逃れられなかった俺だが、とりあえずは首席という形で合格。
直後にあった『使える魔法』のお披露目でも、試験管もとい試験官の目を剥かせた程

度のデモンストレーションになったことも功を奏したらしい。
そんな首席になっての代表挨拶。
アールスハイドに乗り込んできた最初の目的を『これ』で果たせそうだったので、恥を忍んで『大発表』を執らせてもらった。
お隣、戦争の準備してますよ？　ってね。

「……迂遠だが、確実な手法だな。物価を下げることにより、作物の製造者が生産力を自然と上げる。自分たちが食えなくなっては幾ら働いても旨味も無いから、造り手は必死になって領主や国へ納める作物を増やしてゆく。そうして無料同然で引き上げることで物資を積み上げて、戦争のための蓄財をしていた。そういうわけか……」

ディセウム・フォン・アールスハイド、この国の王が語る。
俺が演説で仄めかした事情を反芻しているだけなのだが、口にすることで理解を更新させようとしてるのかも知れない。
ちなみに、帝国は貴族至上主義。
農民の作物を無理矢理搾取することには何の躊躇いも持たず、いざとなったら堂々と戦争準備だという名目を隠しもせずに敢行するだろう。

それを行使していないのが、どうにも気に懸かるけど……。
ひょっとしたら、あの国『他国の現状』を『把握』し切れていないのやもわからんね。
斥候部隊というか、諜報機関のようなのも居たはずなんだが。

「しかし、よくそれを伝えに来てくれた。このままだと、我々は帝国の策略を知らぬままに侵略に乗り出されていたかもしれん」
「ああ、お気になさらず。遊学の嗜みのようなモノですから」

まぁね。
戦争に成ったら勝敗は知れないけど、戦争と『成立』する前に『被害』が出るからね。
具体的に言うなら進軍道中の街や村。
戦争は両者揃って『よーいどん』で始めるほどクリーンなモノでは無いのだから、そうなったらそうなるのも当然っちゃあ当然のことだけど。
それで納得して呑み込めるのなら、統治者としては優秀だけど人間としちゃ駄目だからね。
そして、俺の『王国でやりたかったこと』がまさにこれ！
帝国の秘匿事情 詳(つまび)らかにして、相手が『どういう対策』を建てるのかを愉快に俯瞰さ

せていただく！

いやぁー、帝国(他人)の失態で紅茶が旨い！

大々的に代表挨拶ではっちゃけた甲斐があったってなもんさァ！

実際、ヒト死にが出ると中々苦渋で苦汁だから旨くも無いけれど、そういう命が絡まない程度の失敗を覗くことはそこそこ有意義な『遊学』に建て替えられる。

死なない程度の失敗学。

命を担保に換えることなく、人の振り見て我が振り直せるならば、それは充分に学べることだよねぇ。

「……しかしわからん。何故、こうして生産力向上だけに気を張れる……？　あの国も、我が国も、魔物の脅威度は変わらないはず……」

「ああ。帝国は学習水準の低迷化のお陰で『魔法使い』が減ってますからねぇ。そりゃあ魔物だって減りますよ」

「――いま、なんと？」

……ん？　あれ？

なんかみんなの目の色が変わったけど、俺ひょっとして、なんかやっちゃいました

……？

■

魔物とは、ふぁんたじいな異世界であるにも関わらず、前世の素敵な宇宙船に相乗りしていたアニマルなフレンズが、魔法の使い過ぎで過暴走（オーバーロード）を引き起こした成れの果てで御座る。

この世界の『魔法』は生物であれば誰でも扱える超文明的な『なんちゃってマジカル』で相候。

必要性の有無はさておいて、『使えるモノは使う』のが生物としての本領なれば、彼らは自ずから身を扶（たすく）手段へと踏み出すことも躊躇わぬモノ形。

参考文献、ウエスト侍放浪記より、抜粋。

ちなみにこの世界の竜、恐竜が絶滅『しなかった』理由は多分コレ。

生き延びられる魔法手段を使って生き延びる。

生物なのだから、自分から好き好んで絶滅に踏み出したりはしないよね。

逆に此奴ら生き延びてて哺乳類が進化に台頭出来るはずがない気がするのだけど、まあ、同時多発的に『発生』でもしたんじゃねーの？　何処かの箱舟伝説的に、纏めてこ

の星に降りたとか、そんな感じで。

で。

その辺りの『暴走』が発生する根本的な理由だけども、そもそも『そうなる』時点で自然として『おかしい』。

動物は良くも悪くも身を弁える。

特に野生生物なんかは、自分の分に合わないモノを得ようと無茶をすることがほぼ無いので、人間みたいに貪欲に『今以上』を要求することが稀すぎるのだ。

欲しいモノは欲しい分『だけ』。

言葉にすると難しいが、意図くらいは読んでくれると嬉しい。

では、なんで其処まで、魔法を使えなくなるレベルにまで『溜め込んだ』のか。

それは『そうしたモノ』が『其処に居るから』だ。

誰かが意図して魔物化させている、というＭＭＲ的な陰謀論も『在り』だが、俺的にはそうして個人事業でちまちま防波堤造るみたいな『ひとり遊び』じゃ限界点が在ると読む。

なので、意図も示唆も無い、単純な理屈で事を語る。

魔法を使うと、魔物が増える。

単純に言ってしまえば、これだ。
正確に云うと、多量の魔力を消費する攻撃魔法なんか、か。
雀の涙的に使い手で１０円ずつ出し合って1億の魔法使いで戦車(魔物)を買う、みたいな結果となっても構わないが、爆発的に増えた理屈を突き詰めると最大の原因は其処だろう。
では何故魔法を『使う』ことで『増える』、何かのマネーロンダリング的な理屈が働くのか。

魔法とは感情の、明白には『意志』の延長線上に作用する現象だ。
其処に働く使い手の『意図』は、目的を以て集約された魔力にしっかりと付着して、『結果』に変換するように『魔法』を顕現させる。
このとき、使い手の『意図』は消失したりはしない。
そもそも、集約された魔力が魔法へ完全に変換しているかというと、そんなことは無い。
炎を生み出す化学現象でも、灰と炭がしっかり残る。
燃焼には空気ですら結合を果たし、炭素が酸化して二酸化炭素へと転換する。
エネルギーを取り出すだけでも、排出される『何か』が発生することは当然の理屈だ。

魔法と云う結果を引き出して、使用された魔力は『使い手の意図』つまりは『感情』を付着させたまま大気へと還る。
敢えて名称を付けるなら、『廃魔力』とでも云おうか。
産廃処理されない魔力、みたいなネーミングで。『排出』にも掛かってるが。
その廃魔力を取り込んだのが、魔物になる。
そういう理屈だ。多分。

ちなみに、廃魔力で人間が即魔物化しないのは、人間には他人を拒絶する『抵抗』が根本的に備わっているためだ。
『免疫』とも呼ぶが、自己と他者とを同一と見做さないようにする、生物的なその本質が『他人の魔力』を受け入れないように働いている。と、思う。
じゃあ動物にも『そういう部分』はアルンジャネーノ？
と思われるだろうが、そもそも動物は魔法を使わなくたって生きていける。
魔力を集めているのではなく、攻撃的な意図を含んだ魔力を蓄えている『餌』を喰い貯めて、彼らは『魔物化した』と説を語る。
植物なんかは拒絶しないし、廃魔力たっぷり含んだそれを喰って、草食動物だって暴走するするー、テンション上げ上げー→。みたいな。

または、そうしてギリギリにまで廃魔力溜めた草食動物を喰った肉食動物が、関ヶ原から脱出する島津みたいに血肉アゲアゲー→→。みたいな。
そんな自説。

「返答や、如何に」
「……し、信じられん……っ！」

色々と掻い摘んで、この世界で『通じそうにない』喩えなんかをすっ飛ばして。
説明し終えたら国王様以下全員が茫然自失ですね。
やっべ、どうしよう。

「とりあえず、試しに火でも魔法で点けてみて、それを他の人から魔力探知で観測して見りゃ廃魔力（仮）が出てるかどうかだけでも分かるかと思いますよ？」

出るだろうけどねぇ。
出ない方がおかしい。
だって、物理現象働いてるのに、其処だけ都合良く産廃無いわけが無いだろうし。

そんな思惑で促せば、実際やってみてその通りに成って、ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・となり逝く皆様方。

なんだか顎も尖ってきているような、そんな錯覚。

「……私は此れからこの話を宮廷魔法士団へ持ち帰り検証に合わせる。対帝国への検討も必要となってくるが、とりあえずは魔法使用の禁止令を発行することになるだろうな。済まないがオブシディアス・ヴァヴランテくん、キミにも王城への同行を求めたい」

「アッハイ」

そういう、ことになった（夢枕獏。

■

そんなこんなで話を突き詰め合わせた結果――。

――他国へ出張して帝国締め上げに参加することとなりました。

お仕事でーす、チクショウ!!

色黒と妹

「どういうことなんですかッ!?　魔法学院なのに、魔法の研究が進められないだなんてッ!?」
「攻撃魔法研究会は特に活動を自粛!?　そんなッ!?」
「自主練習も禁止？　私たちはなんのために魔法学院に進学したの？」

ディスおじさんからの告知が学院へ届き、生徒たちはいっせいに騒ぎ出していた。
それこそ暴動でも起ころうかってくらいに騒々しい。
『王命』だから学院も意見を突っぱねることはできないし、説明を求められている先生方も大変そうだ。
っていうか、騒いでいる生徒たちの中にSクラスの女子もシレっと居るんだけど。
あの眼鏡の子は、確かリンだっけか？

「シンはあの中に混ざらないんだな」
「まあ、俺は昨夜のうちにディスおじさんにしっかりと釘を刺されたからなぁ。仮にも

『賢者の孫』って立場だから、他の生徒みたいに騒ぐな、ってさ」

正しくは、『魔物を発生させていた原因』が俺にもあるかも、ってことを自覚したから混じり辛い、っていうのが心境だけど……。

攻撃魔法を使い過ぎると魔物が増える、ってじーちゃんにも教わってなかったもん。

最近になって発覚したから、宮廷魔法士団の人たちが研究を終えるまでは迂闊に使うな、って釘を刺されたんだけど、云われたことが正しいって仮定するとそれっぽい要素が今までにチラホラあったしなぁ。

……あの森で強い魔物にやたら遭遇すると思っていたら、マッチポンプだったっていう……。

ディスおじさんは俺の攻撃魔法の威力の高さを知っているから、『この話』をじいちゃんやばあちゃんに教えに来たついでに俺に『動くな』って言いに来たんだろうけど、流石に自覚させられちゃったらなんもしないって。

森での生活までは全部話して居ないから気づかれなかったかも知れないけど、俺の責任かもって言われ出したら否定することも出来ないしな。

「ああ、そこは絶対に見逃せないな。お前が『あーいう風に』騒げば、自分たちが優位だ

と生徒も調子に乗る」
「お、おう、そうだよな」

オーグの言葉に頷く。
そういうつもりもあったのか……。
細かいことはよくわかんないけど、前世から集団に混じるのが苦手だったからなぁ～。
結果オーライってことにして黙っておこう。

「もー！　殿下もシンくんも呑気にしてる場合じゃないでしょ!?　魔法学院なのに魔法使うなって可笑しいもん！　いっしょになって抗議しなきゃ！」
「いや、そのことについて話してたんだって」

入学式後のなんだかんだで、なんとなく仲良くなったアリスが集団から跳ぶように外れて来て叫ぶ。
その話は無いって、こっちで決めてたんだから蒸し返すなよ。

「……禁止されているのだから、さっそく身体強化を使うなアリス」
「使ってないもーん！　今のはあたし本来の力だっ！」
「兎か何かかお前は」

ぴょんこ、といった感じに飛び跳ねてたし、オーグの言葉も言い得て妙だ。
アリスでウサギ……うん、こっちに『不思議の国』はあるかは知らないけど、口を挟まない方が良いよな。

「そんなことより！　同じ魔法学院の生徒なんだし！　権力には従えないってダンコーギしなきゃ！　学院はブレイコーなんでしょ!?」
「そんなことは無いし、階級制度の緩和は貴族と国民との軋轢を減らすための政策だ。それに準じる『学院内だけ』での校則であって、流石に王命にも逆らって良いとは云うわけないだろう」
「そうなの～ぉ？」

む、難しい話してるな。
アリスは着いて行けてるのか……？

「それにしたって、あたしたちの実力のお披露目も無しに禁止だーって無いと思わない？」
「むしろ其処があるから此処まで早急に王権を発動させた節があるな。魔法を使われたら、何か困ることが隠れているかもしれない。なんにせよ、父上だって自分の利だけでこんな『命令』を下す方でも無いんだ。云われたからには普通に従え」
「はぁーいぃー」

同い年とは思えない、子供染みた返事でアリスは集団へ戻っていった。
再び同じように騒ぐのではなく、何人かの知り合いに云われたことについて教えに行った、っていう感じだ。
結局、俺は口を挟むことなく遣り取りは終わった。
混じるのでもなく、おじさんやオーグのように口を挟むでも無く、俺の立ち位置は若干ふわふわと浮ついている気もする。
でもまあ、下手に突いて藪蛇にするほど、俺だって性格悪いつもりもないし。
大体、前世含めたらイイ年に成ってるんだから、何かを禁止されたら子供みたいに抵抗するっていうのも恥ずかしいことだし。

しっかりとした理由もあるんだしな。
厨二な詠唱も恥ずかしかったけど、それよりも子供みたいな真似を晒すのもナシだろ。

「それに、シンは魔法よりも学ぶべきことが優先されているからな。そもそもアレに混じるのも変な話だろう」
「え？　なんかあったっけ？」
「……お前は『常識』を学びに来たんだろうが」

……そうでした。

■

いやぁー、帝国は強敵でしたね！
嘘嘘、冗談。
正しくは一切ぶつかり合ってません。
だって攻撃魔法禁止させたの俺だし。

直に止めたわけじゃないけど、原因究明しちゃったら結果的に禁則処理の大元にされてるからね。
使わなくても消し飛ばせるけれど、それやっても誰にとっても旨味も無いし。
俺が働いたのは周辺国や、他の４大国に話を通しに王国上層部を連れて行った程度。
要するにツアーバスガイドみたいなもんだね。
あと序でに現地での対抗実地工作をちょこちょこと。
全容把握した王様やアールスハイド上層部は「なんだこの外道は」みたいな目を向けて来たけど。
誰も進んで殺そうとしてるわけでも無いのに、変な話だわ。
さて。
仕事もひと段落したことだし、後は仕上げを御覧じろってね。
学院に戻ってのんびりとおべんきょうに勤しむ時間がやってくるわぁー。

「あ、こんにちわですっ」
「はいこんにちわ」

もふわぁー、と欠伸しながら王城から出て行こうとしたところで、幼女とエンカウン

ト。

現代日本では返事するだけで事案になるのだが、こっちでは礼には礼を返さなくては失礼に当たる。

……いや、元来がこういう形式だったはずなのだが、いつから突飛な方向に現代の過保護は加速したのか……？

考えても意味の無い考察はさておき。

曲がり角で出会った幼女は、直ぐに立ち去ろうという様子も無い。

肩と胸元の肌を晒した、お下げ髪の幼女。

……どちら様であらせられます？

「あ、あのっ、私、メイ・フォン・アールスハイドですっ」

「……オブシディアス・ヴァヴランテです」

――王族だよ。

え？　なんなの？　どういうつもりでこの子は待ち構えてたの？

……待ち構えてたんだよな？

立ち去る様子が無い、ってことは、用件があるっていうことだし。

「あの、私、オブシディアス様にお願いがあるのですっ」
「……オブシーで良いですよー……？」

流石に何処かのリッツバーグくんみたいにフランクにするわけにはいかない。
何より子供であるし、下手に悪影響与えたりしたら普通に首が飛ぶ。
王権国家の王族はそれくらい厄介だ。
みんなも良く覚えておいてくれよなっ！　みんなって誰だ。

「オブシー様？」
「様付けとか要らんですから」
「ねんこうじょれつに権威は関係無いのですっ」

王族らしく我が強いわぁ……。
でもこれ我って云うのかね。

「それよりもっ、オブシー様にお願いがあるのですっ」

「はぁ」

なんでしょう。

そもそも初対面なのに、何を以て用件に繋げようとしてるんだ？

「メイにも、飛行魔法を教えて欲しいのですっ。私もお空を飛んでみたいですっ！」

「……あー」

そういえば王城から直接運んだね。

それを見られてたかー。

……。

教えるのは吝かでも無いけど、相手が相手だし許可くらいは必要だよね？

さっきから一言も発しない護衛の人にでも言っておけば良いのかな？　姿見えないけど。

帝国と自由商業連合国

ブルースフィア帝国現皇帝、ヘラルド・フォン・ブルースフィアは有頂天にあった。
今が人生の絶頂だと、本気で調子に乗っていた。
国内の魔物の脅威に国政を脅かされることも無く、生産力が向上したことで自分たちの懐を痛めることも無く国家が発展する。
何しろ、国内の食い扶持が自分たちで賄えるほど作物が富んでいるのだ。
麦に関しては大穀倉地クルトからの輸入に頼っているとはいえ、それ以外の自給に余裕が出来る。
其処から少しばかり『自分の』懐へ廻しても、国の屋台骨は揺るぎもしないと、本気でそう思っていた。
思っていたからこそ国内消費の価（あたい）を今まで以上に引き下げて、軍事発展に使い込むつもりだった。
引き下げた分の農地への補填など、微塵も考えずに。
「――エルス連合からの使者、だと？」

「はい陛下。如何なさいますか？」

そうして『使える金』の余裕が出来た丁度その時期に、件の使者が訪れたのはまさに天啓にも似たモノを彼は感じていた。

「いやぁ～、皇帝陛下にはご機嫌宜しゅう。ジブンはエルスから来張りました、ウサマ・ナバルいいます。以後宜しゅうに」

「前置きは不要だ。……売り込みたい武器があるそうじゃないか？」

エルス特有の口調で、朗らかに滑弁を披露するのは壮年の男性だ。

宰相から聞いたナバルの売り込み文句に、ヘラルドは興味津々で食いついていた。

「ええまあ。なんでも、帝国は今随分と好景気なご様子で、陛下の恩情にウチらもあやかりたいと来た次第でしてな」

「不要だと云ったはずだ。見せて見ろ」

「ハイハイ。――おい」

ヘラルドの態度に不愉快になることもなく、ナバルは笑みを崩さずに後ろに控えていた幾人かの付き添いに命じる。
『聞いていた』通りだ、売り文句に耳も傾けなかったのだから、随分と好戦的に『なってくれている』。
そんな内心を抱いたナバルの微笑は、決して絶えることも無かった。

「――ウチが売り込みに来たんは先にも言った通り『武器』でしてな。昨今の兵士の武装になる剣やら槍やらといったモノよりも、ちょいと有利に戦えるモンを売りに決ましてん」
「フム……？」

ヘラルドの目は温度を変えない。
財布の紐は緩まないままだ。
だが、其処はナバルも承知の事。
その興味の薄さは、『自分も』通った態度（みち）だ。

「陛下。失礼を承知で尋ねますがな、陛下は近接戦に於ける『剣』についてどう思います

?」

「……。剣もまた、武器だろう。無礼者を切るための、他に通用など無いがな」

ヘラルドの意図は、そのまま目の前の『商人』に向いている。

言い分も敬意も買える程度だが、同時に無礼も執っている。

仮にも大国の代表として来ているから見逃しているが、その調子で無礼を続けるならば切って捨てるぞ、と云わんばかりの内心だった。

「かぁ～っ、わかっちゃおりまへんな陛下も！」

だが、ナバルの調子は、冷淡なその態度すら気に掛けなかった。

謁見の周囲に待機している兵士たちの方がその態度には目を見開き、下手に悋気を興してくれるなよ、と恐々粛々と控えていたほどなのに、だ。

ナバルの舌は、滑らかに動く。

まるで二枚あるかのように、途切れない説法を繰り出していた。

「剣なんちゅうのは『予備の武器』ですわ。魔法っちゅう『戦闘の主力』がある以上、接

近されたことに即応するためだけの最低限身を守れる武装。実際、切っても切れん時もありましたやろ？　王国には『剣聖』っちゅうお人もおりますが、全員が全員そのレベルに達せるわけでもありまへんしな」

それは、啓示にも似た言に聴こえた。

兵士たちの中には、鍔競り合って硬直したことを実感したこともある。

武器としての最低限の携帯性と、振るうだけで距離を取れる即応性。

云われてみれば、剣自体には『それ以上の価値』が感じられない。

しかし、

「ぶっ、無礼だぞ貴様ァ！　皇帝陛下に、なんという口を利くか！」

宰相が吠えた。

ヘラルドもまた、剣で以て王命を下す者のひとりである。

それを直には言葉に出来ない不自由さが宰相にもあるからこそ、曖昧な言い分でナバルの無礼を叱咤することしかできなかった。

剣には、権威もまた付随する。

彼らは知らないが、日本神話の【草薙の剣】は『草』と呼ばれた下々の者たちを『薙ぐほど』の命令権を備えている。

元の名である【天叢雲】とは『海の群ら蜘蛛』とも換えられた。

蜘蛛とは『朱を知る虫』。

即ち『朱塗り』の『水銀』を始めとする『鉱脈』を知る、海辺を始めとした辺境にて群れる『賤民』とされ、彼らとの橋渡しを約定に定めた『選定剣』がそれの役割であったとされている。

閑話休題。

時代を遡れば、杖に槍、それこそ斧にも『王権』はあった。

剣は時代を引き摺った『携帯できる武装と権威』の集大成のひとつであり、範囲内で取り扱える『最大級の攻撃性能』を誇る即応武器。

しかし『戦闘に於ける最強』には絶対的になり得ず、魔法という主力が働く以上は『弱い武器』としかなり得ないのが現状なのである。

「無礼は承知ですがな、売り込みに来たんですから、売り文句くらいは言わせて欲しいですわ。商人に働くなとは、流石に無理な相談でっしゃろ？」

「しかしだなっ、」

「……良い」

宰相の言葉を、他でもないヘラルド皇帝が諌めた。

しかし、

「今は見逃そう。だが、私が見逃すほどの『旨味』が、貴様の商品にあるとでもいうのだな？」

視線に籠る熱は増せども、其処には恪気にも似た感情が仄めかされている。

これで期待を外せば、ナバルは『帝国には来なかった』として処理されるだろう。

それをナバル本人も自覚していることを見通して、ヘラルドは更に言葉を紡いだ。

「貴様は私に『わかっていない』などと嘯けたのだ。一度ブルースフィア帝国皇帝を評したからには、相応に処罰するべきだと思うがな？」

「いやいやいや、それが普通です。それが『今』の『程度』なんですわ。だからここは、『抜け駆け』しまひょ？」

ナバルは言質までは取らせない。
前置きまで済ませたのだから、見せるモノをしっかり魅せないと『仕事』にならないからだ。
命じられていた丁稚らが、ナバルの後方から『それ』らを運び出してくる。
ガシャガシャと金物が動く音が響いて、謁見の間にずらりと立て並べられていた。
「――『ハルバード』言います。斧の破壊力と槍の射程を兼ね備えた、敵との距離を取って無防備な上からブッ叩くように防御姿勢ごと潰せる武器ですわ」

■

「いやぁ。ホンマ寿命縮んだわぁ～」

帰り道、空の馬車に揺られて、ナバルは冷や汗を拭った。
『商売』だから負ける気などは無かったが、流石に『兵士用の武装』を売り込みに来られて買うほどの余裕を、ヘラルドが持てているとは見通せなかったのだ。
『ハルバード』から始めて色々と並んで話を落としてくれた小僧は『理屈』で『出来合

い』を計った様子であったが、ヘラルドレベルの『感情論信者』にそれを通せるとまでは見通せていなかったのだろう、とナバルは思う。

尤も、その色黒小僧はそこら辺の出来高に関しては然程も興味も抱いてなかったりする。

失敗する時は失敗するし、成功したら御の字くらいの程度で物事を読んでしか居なかった。

要するに、ナバルの命に関してはほぼ自己負担で放置でしかなかった。クソである。

「しかし、よく買ってくれましたよね。兵士用の武装だなんて、魔法がある時点でそれこそ剣だって意味が少ないのに」

「其処はヘラルドはんの戦闘論に由来するんやろな。兵士らが正面からぶつかり合って数で削り合うとか、そういう風に思っとるんちゃうか？」

「ああ、成程」

「あと帝国式『教育』のお陰で魔法使いが少ないんや。兵士に武器を回すんは軍事用として必要な采配なんやろ」

偉そうに言ってるが、この辺りも色黒から唆された帝国内情報に付随する。

そういう『買い手』の事情を汲ませたからこそ『商売』に乗り出したのだから、色黒は色黒で『商人の使い方』をしっかりと弁えていた。
最終責任放り投げるのは、矢張り屑みたいな話だが。

「さて。それじゃあお仕事もこれでお仕舞ですか？」
「そんなわけないやろ。売ったからには買って帰らな、ヘラルドはんにも許可貰たしな」

ハルバードを売り込んだ経緯に当たって、俯瞰するとナバルのやったことは『死の商人』に値する。
それを大っぴらに遣れるほど面の皮は厚くはなれず、また他国から睨まれるであろうことは避けたい、とナバルはヘラルドへ仄めかしていた。
其処で、エルスの商業基準である『自由』に由来する、売買の取引内容を公けにしないことを条件に、ナバルは『帝国内部での売買の許可』を全般的に取り付けた。
商品の総量を誤魔化すために、売り付けと買い付けを帝国内で組み交わし、そうすることで帝国内にも買った分の金利回収を約束した。
それらの『約束』を聞くだに帝国に充分な『旨み』が還元されることをヘラルドは汲み取り、彼らは密約を交わしたのである。

完全に『死の商人』の面目躍如。
充分に、面の皮が厚い。
尚、これもまた色黒が唆した差配である。ホントあの野郎は。

「ほんでは、帝国領内の村々を巡って、作物の買い付けにイクでぇ～！　この辺りは小僧との約束やしな、キバっていくでぇ～！」
「「「ぼちぼちでんなぁ～！」」」

良く判らん掛け声で、『空の馬車』が帝国内を巡って往く。
帝国領に奏上する売り上げ以上に『高く』買い取ってくれる商人らが、豊作と噂される帝国作物を買い付けに回るのだ。
――根こそぎ買われて往くのは、目に見えていた。

帝国と神聖国

「……もう一度言ってみろ、宰相」

ヘラルドは部下の言葉に、怒気を仄めかせながら口を開いた。

先日購入したハルバードを抱えて脇へ控えている、戦国時代の城主に仕える小姓のような役割の兵士がいる。

早々に『王権』の象徴として剣から代替えした強力な武器だが、ヘラルド個人で抱えているには重量が問題であると発覚したのだ。

件の兵士は、ヘラルドに変わって武器を控える役割を与えられており、彼個人には人権も無い。

その兵士からハルバードを手にし、宰相へと振り下ろしてやろうか、とでも言いたげな怒気だ。

武器を所持し直すタイミングが生まれたお蔭で、剣を所持していた頃より鬱憤を晴らす機会は減った。

だが、憤慨を不信と不満から常に滾らせている皇帝の恪気が変わることは早々無い。

序でに云うと、破壊力が加わったお蔭で鬱憤を請ける部下は誰もが無惨にされており、その死に目には自分はなりたくない、と誰もが忌避するほどの凄惨さだ。
尚、変わって精密性は下がっており、ハルバードの一撃は中々当たるモノでも無い。
しかしまあ、皇帝の鬱憤を躱して見せる部下など居るはずも無く、ヘラルドはハルバードの一長一短には終ぞ気づくことは無かった。
話を戻す。

「武器を兵士たちに与えた。ソレが王国へも流れない、などという保証がない以上、攻めるチャンスは今が最良だ。だのに、貴様らは戦争を仕掛けることを避けろと、そう云うのか？」
「っ、お、お言葉ですが陛下！　戦事には武器だけでは足りませぬ！」

宰相は勇気を出して進言する。
ヘラルドが『鬱憤晴らし』に間を置くことが必要となったことを計算に入れながら、宰相は言うべきことを述べて延命を図ろうと躍起になっていた。
感情優先で事態を引っ掻き回す皇帝であることは知っているが、仮にも国家を差配していた『無能な上司』に変わって仕事を熟しているのは自分だ。

などとも思ってもいたが、今はその自尊心も鳴らせることも無い。
実際に労働を押し付けられているのは、それらの『無茶な差配』を命じられる『労働階級』の平民らになっていたのだが。
其処も、今は割愛する。

「昨日今日で見せられた新たな武器を扱うには練度が足りませぬ！　誰も扱ったことが無い武装なのです！　上手い使い道を探るのが目下の課題でして……！」
「それくらい直ぐに熟せ！　私はできたぞ！　そんなことも出来んのか兵士らは！」
「時間が足りませぬ！」

実際は『出来てなどいない』のだが、其処は流石に宰相も言を憚られた。

「誰もが陛下のような才を持つわけでもないのです！　どうか御慈悲を！」
「うぬぬ……！　無能どもめ、今がチャンスだというのが、何故わからん……！」
「それに、他にも足らぬものがあります」

癇癪と鬱憤晴らしで言い分を第一にし続けることを優先していたが、それが出来るの

は余裕がある時だけだ。
　皇帝の前に座り込むように頭を下げた宰相に代わって、進言を革めたのは別の男だった。

「貴様まで口出ししようと云うのか、将軍」
「失礼ながら申し上げます。先ずは兵站……、食糧に予備武装の補充が肝要かと」
「食糧だと？　昨今は豊作であったであろうが」
「足りませぬ」

　魔物の脅威に晒されることが減少し、作物の製造量が増加傾向にあったことは把握していた。
　吐いて捨てるほどの自給率を得られていたために、ヘラルドは国内生産作物の価格を引き下げて、浮いた国費を軍事費へ回していたのだ。
　さらに戦争に成ることで『軍需用』という名目で農作物の接収を執り行った、そのつもりだった。

「徴収は終えたのだろう！　何故足りぬ!?」

「将軍の尽力が足りなかったのでは？　国内流通を鑑みても、不足に至るとは到底思えませぬな」
「キチンと帝国の隅々まで布告したのだろうな？　農民の隠し持っている食糧も徴収せずに足りぬなどと云うのであれば、職務怠慢と見られても言い訳は出来んぞ」
「説明したまえ将軍！　何故足りないのかね!?」

　謁見の間に居合わせていた貴族たちが騒ぎ立てる。
　将軍が口を挟んだことで口出しが出来ると、ヘラルドマインドの安全圏を計ったのだろう。
　ここぞとばかりにピーチクパーチクと騒ぎ立てる口だけの雀らに、将軍は井桁を蟀谷に浮かべて返答した。

「……どうにも、先立って買い付けを行っていた者らが居た様子でしてな。国外の、商人らが帝国で定めた買い取り額を大幅に上回って買って行った、とか……」
「それ、は……!」

　貴族らが、一斉に押し黙った。

紛れもなく、それを執った商人らとは、帝国へ武器を卸したエルスの者たち。
そして帝国内での売買、それを許可したのは他でもなく。

「……将軍、それは、私に非があると、そう言いたいのか……!?」

ヘラルド皇帝その人が、憤慨を抑え切れない様相で震えていた。
それが何よりも凄まじい怒りに寄るものだとは、誰の目に見ても明らかなことだ。

「……っ、の、農民は我々が思っている以上に怠慢であったようですな！」
「い、いやまったく！　我々が支配してやっているというのに、考え無しはこれだから困る！」
「国家の大事に個人の欲を掻くとは！　これだから奴隷どもは卑しいのだ！」

貴族らは口々に話題を切り替える。
ヘラルドの悋気を抑えるための言葉だが、如何せんそれらは皇帝の為人をあからさまに指す言葉でもある。
互いにその事実に気付いている様子もなく、部屋の外で様子を伺っていたゼストは溜

め息を吐いた。

誰にも気づかれないようにとの配慮も抱いているが、そもそも彼を気に掛ける者は城内には身内しか居ない。

「……（他国（エルス）の商人に『買い付けの自由許可』などを与えれば、どうなるかなどと判り切っていることだろうに。『荷の重量を国境で測る』などというのも、これまでにも聞き覚えの無い輸出規制だ。隠蔽に力を入れる余りに、他人も『そう』であると思い込みすぎたな、ヘラルドめ）」

そもそも、国内で学習水準を引き留めている帝国とは違い、他国の人間は比較的自由に魔法を学ぶことが出来る。

各家庭並びに、国家采配を引き受ける貴族など。

子や部下へ学ばせることを制限する法律も無いので、何なら学徒の流入出を押し留めないアールスハイドへ留学を選択することも許されている。

国民を奴隷のように扱うために引き留めている帝国とは、基準からして全く違うのだ。

そうなれば、新たに生まれてくる『魔法使い』の数は比較にならない。

さらに、その中には『収納魔法』を扱える者だって居るだろう。
売買の証拠など、ただ国境を跨ぐだけでは追及などできやしない。
自由商業国家の商人らが取り次いだ『約束』は、結局のところは紙手形であり、ヘラルドの企みなどは何時だって裏をかかれることが容易いモノでしかなかったのであろう。

――と、ゼストは信用もしないエルスの商人を、そう判断した。
が、実際のところは違う。
取引や売買は詰まるところ『信用』の問題だ。
隠れて執り行うにしろ、明け透けに交わすにしろ、行き交う以上は其処には必ず『相手』が実在する。
相手よりも僅かでも多くの『益』を得たい、と臨むのが対峙する者たちの心理ではあるが、根本として感情を備えたお互いに人間であることが前提なのだ。
『相手』以上の『益』を得れば、代償として『印象』に比重が傾くことが当然になる。
要するに『信用』と『信頼』が、次回への布石として感情に左右するのだ。
マイナスに、プラスに、其処の比率こそが『取引』には重視される。
だからこそ『商人』には、一朝一夕では成り得ない経験が必要とされてくる。

『相手』の『悪感情』を『勘定』に入れなくては、次の取引も儘ならないのだから。
ゼストの思考は、思いのほか大事な点が履修されていた。
しかし彼自身もまた、帝国によって正しく『学習』を得られていない身。
人間不信の気(ケ)を持つ彼の、判断が正しいかどうかなども、誰にも精査し得ないことである。

「(しかし、妙な展開になってきた。シュトローム様の命令に動くことは吝かでは無いが、このままでは王国へ戦争を嗾(けしか)けることなど出来もしない。ヘラルドは無能だが、帝国貴族全員が『それ並み』というわけでもないからな……。もう一歩、シュトローム様の動きが先んじていれば、エルスなどが嘴を挟む前に突き動かせたのだが……)」

シュトロームが王国に居座っているのは、魔物化と魔人化の最終実証実験のためである、という点までは聞いている。
ゼスト率いる、帝国貴族に『鼠』と揶揄される諜報部隊。
その全員を魔人へ転じさせて、帝国を根底からひっくり返す。
それが、彼らの目先の目標であり、彼らがシュトロームの謀略に乗り気になった最大の目標でもあるのだ。

なのでゼストも、シュトロームへ急げなどと無理を云う事は出来ない。
だが、自分たちの勝率を上げるためには、策は一手でも二手でも、先んじて備えておいて損は無い。
其処まで思考したところで、室内ではまた話が進んでいた様子である。

「ひとまず、接収した作物は配布し直すことが優先でしょうな」
「しょ、将軍!?　軍備として徴収したモノを、分け直せと、そう云うのか!?」

狼狽えた貴族が口を挟んだ。
それを無視するように、未だ憤慨止まないヘラルドへ、彼の男は向き直ったままである。

「戦になる見通しが無いのです。貯め込んでいても、腐らせるだけでしょう」
「……私の財となったモノを、奴隷に分けろと。そう云うのか」
「富は動いてこそ意味を持ちます。後生大事に抱えていても、その価値を下げてまで抱くのは只の滑稽です」

物怖じしない言い分で、彼は進言を止めない。
ヘラルドの気分は下降するばかりだ。
逆に、言葉を聴いていたゼストの中では、彼の株が爆上がりだった。
言葉として、貴族らが『徴収』と口にするのに対して、意味合いの違う『接収』と使い続けていたことまでは見通せていない。
しかし、貴族であるにもかかわらず、平民を無為に搾取するだけで終わらせようとしていない点は、ヘラルドへ進言を取り止めない点を顧みても高評価であった。

「それに、このままでは喰うモノに困窮した平民らが暴徒と化します」
「日に食えなくなったくらいで、そんなことが起こるものか」
「……後押ししたのは、我々です」

余りにも考え無しな言い分に、流石の彼も言い淀んだ。
徐々に削られた作物の価値と、実際に削られた食事の量。
合わせ技の『餓(かつ)え殺し』が帝国で発動中なのだが、その辺りまで把握しているのは策を知っている王国上層部並びに、王国内で現在幼女に出張魔法教室を披露している色黒くらいである。

「鎮圧が容易いとはいえ、暴動を見過ごせば王国へ戦を仕掛けるなど、また遠ざかります」

その言葉が後押しとなって、漸くヘラルドが言葉を呑んだ。

彼の『気分』に、押し勝ったのである。

ゼストの中で、将軍の株価がストップ高を計測していた。

「……確かに、此処で勝てる勝負を、わざわざ捨てることも無いな。――チッ、王国を討つのは『次』へ見越すしかないか」

「ご配慮、感謝します」

おおお、と室内にどよめきが静かに響いた。

一介の将軍が、皇帝陛下の取り決めに逆らって、成果まで果たして見せたのだ。

気分屋で癇癪持ちの子供大人を、命を欠けることなく言い包めた彼を、勇者のように崇めるのも無理のない話であった。

「ご配慮序でに、もうひとつ」
「……まだあるのか」
「一度接収したのですから、どれが何処にあったものかも、平民には判別が利かないかと。なので、引き下げていた分の作物価格を取り止めて、不充分を補填するのも役割かと存じます」
「あ……？」

やばい、あの勇者、今度こそ死んだかも。
話を聞いていた者たちは、ひとりの例外も無くそう思った。わーお。
掻い摘んでみれば、「おめーの政策失敗したから謝罪して足りなかった分も支払えよ。働け」である。
これにはヘラルドも怒髪冠を衝くが如し。

「陛下、これは陛下の為人の見せ場でもあります。陛下が国民のために私財を投げ売って、明日の命を繋ぐことを決して諦めない主上であることを示してこそ、平民らは陛下のために命を投げ打てる兵へとなり得るのです。どうか、彼らも感情を持つ人間であることを、そして積もった不信を解消するチャンスを見逃さないように、再度ご配慮を願

います」

そして勇者の更なるこの言い分である。

グギギギ……！　とドチャクソ憤慨はっぷんに歯を食いしばっているヘラルドに、尚も言い募れるのは蛮勇通り越して単なる命知らずにしか思えなくなってきていた。

と、急にヘラルドがハッとした貌に換わる。

そしてニンマリと笑みを浮かべたのを見て、ああ、これは死んだな……と、誰もが思ったのです。

「ああ、そうだな将軍、お前の云う通りだ」

「……陛下？」

「安心しろ、既に手は打ってある」

「なんと、いったい、どんな手段を……!?」

乗るしかない、このビッグウェーブに……！

ヘラルドの、何故か不気味に上昇した『気分』をヨイショと持ち上げて見せたのは宰相だ。

そもそも今回の『会談』を持ちかけたのも元を質せば宰相そのひとで、対将軍への鬱憤晴らし序でに撫ぜ斬りに遭いそうなのも彼である。

　些かオーバーにも捉えられそうなリアクションで驚愕を見せて、纏めて殺されて堪るか、とばかりに振られたチャンスへ飛び乗った。

　そんな『狸』の皮算用を検算もできるわけもなく、調子に乗った良い気分のヘラルドは、己の『策』を意気揚々と語り始めていたのであった。

「つい先日だがな、イース神聖国のアメン＝フラーなる大司教が謁見を求めて来たのだ。

　なんでも、自分たちの教義からの信仰離れが嘆かわしいなどとぼやいていてな、各国を回って平民どもに『改宗』とやらを説いて回るらしい。　その際に、奴らは身銭を切って貧しい平民どもへ食事を施すなどと口にしていたのでな、私の膝元をうろつく代わりに、この『皇帝の名』に於いてその『救済』を施したのだと証言させるように厳命してある。　今頃は、各地の農村では私の名を崇める者たちで溢れかえっている――」

ホワンホワンホワ～ン烏丸～

あ、さて。

時はアールスハイドで攻撃魔法の『使用』に関しての講釈を垂れた世紀末。

杜撰な原子炉構築して減速材垂れ流すか、燃えカスと云ってプルトニウム２３９を投げ捨てているかわからん管理法を施されたわけでは無いけれども。

その性質に関しての危険性を把握していなかったにしては、制限をしっかり設けていたのは危機意識が最低限度は働いていたのであろう、と推測する。

その割には『攻撃魔法』にばかり注視し過ぎて、利便性と隠密性を併せ持つ他の補助魔法、例えば『収納魔法なんか』にはとんと無頓着だった気もするが。

まあそちらは今は良いのだ。

王国内での取り決めを、身内になったとはいえ高々いち学生の身に過ぎない自分が、嘴を挟めるわけでも無い。

自分たちを押し留める現状とはまた別に、王国外苑での魔物の増加傾向、並びに帝国の物価下降から予測される戦争準備を『併せて』差し込んだタイミングが不味かった。

狼狽えても問題へ立ち向かう、逆境への立ち振る舞いを、魂の煌めきを垣間見たかっただけだというのに、何故に俺は働かされているのでせうか。

――いや、問題提起したのは俺だし、案があるなら出してくれるかと問われたのも俺だ。

多少の危機意識を煽るためとはいえ、ちょいと聴き取られ易い『ように』手心を加えたのも俺だわ。

かと言って、出した『提案』をほいほい呑んで、そのまま働きに連行されるとは思わないじゃない？

……長距離移動手段くらい持っとけよ。

なんで俺のル●ラ擬きで移送せにゃならんのさ。

スピードが命題な案を定義したのは俺だけども、根本的な部分で『ただの学生』の提案で国家が動くとは思わないじゃない……。

まあ此処まで連れて来たからには、俺も動かせやすいように手と口挟むけども。

大サービスなんだからね？　マッタクモウ。

「で、此処か」

先立って、エルスの商人らには『帝国に売り出せる武器』なんかを売っておいたので、イースにも『旨味』を教えておかなくちゃ比率が合わない。

根本的に間違った教義で動いてる帝国教会から改宗させて『正しい創神教の信者』を改めさせよう、という用向きはアールスハイド上層部の方々にお任せして、俺は俺で『動いてくれそうな人』への『飴』をキチンと定義しておこうという魚心です。

……人間ていうのは、何処まで検めても基本的に『欲』で動くからねぇ。

『正しい』方向へ他人を導かせよう、という『正義』だとしても、その先に確実性と保全が見受けられないとぶっちゃけ『釣り合いが取れない』。

『他国の膝元まで乗り込んで炊き出しと説法咬ませ』という提案は、多少大げさに云うなら『紛争地域で井戸掘ろうぜ！』に置き換えられる。

簡単に呑むとは思えない。

しかも割と綱渡りな作戦で動き出しちゃったから、今更変更利くわけもないし。

炊き出しの材料はエルスが帝国から回収する、余り気味且つ低価格買い取りで持て余し気味な質の良くない農作物が主になるから、エルスの『商売』が上手くいかなくちゃ

イースの働きは普通に赤字で無駄働きだ。
逆に、上手く嵌まれば帝国は自分で自分の首を絞めて自国民餓え殺すド外道政策働かせるのだから、此処で動いて貰えないと俺が王国に非難の目を浴びせられる。
それはちょっと嫌かなー、って。
まあ要するに、財務官辺りに話付けとかなくちゃ、ちょっと不味いよね。
そんな連想。

……しかし、情報管理杜撰過ぎない？
イースという宗教国家で、財政管理を担っている大司教の性的嗜好を、割と赤裸々に知ることが出来たのだけど。
先立って述べた『欲』の例からすれば、実に動かし易い『人格者』ではあるからいいけどね。
まあいいや、アポイントメントも通ったし、手早く済ませて『次』へ行こう。
キリシタンの改修案件で奴隷扱いされた日本人の例題あるのじゃし、其処で詰めれば『若い娘くらいなら摘まめるかも?』って言っとけば通せるじゃろ。

「ごめんくだっさーい」

■

「――そんなわけで、『魔法』に関しての危機意識を王国内では改善中でして。その間、帝国には動かれると困るのです。帝国の魔物被害が減少しているのは確実の様ですし、何時他国が『違う』と目を光らせるとも限りませんからな」

「……まあ、彼らが『戦争』に乗り出せば、我々も被害を被るのは確実ですが……」

アールスハイドから赴いた幾人かの外交員、彼らの対応を任されたのはマキナという司教であった。

彼は、王国から提案された『改宗推奨』の外務作戦に、どうにも乗り気になれない。

確かに、帝国内で横行している『創神教』の名を借りた『全く違う貴族主義』を改めるには良い機会でもあるだろう。

帝国内には魔物という目に見える危険が少なく、貧困に喘ぐ者を救うのだから、その『正義』を諫められる謂れも無い。

だが、それを行使する『場所』が何よりも問題なのだ。

よりにもよって、帝国領内での宗教活動。

アールスハイドが本日こうして姿を現したように、国同士が話を付けるのならば其処に相応しい人間が話を取り決める必要がある。
はっきり言って、帝国皇帝がそれを易々と呑むとは到底思えない。
最初の関門が最も重要で、危険だ。
そんな『綱渡り』を、誰に提案できるモノかという懸念が、彼の中に蟠りを生んでいた。

「良いでは無いですか。救われぬ者へ救いの手を。是非とも我々の手に委ねて戴きたい」
「っ、フラー大司教……!?」

そんなマキナの葛藤を乗り越えたのは、神聖国内で財政管理を任されているアメン＝フラーという男であった。
外交の場に遅れて登場しながら、彼は王国からの『提案』を易々と呑んだ。
それは『自分が責任を以て代表を務める』という、誰の目にもそう映る暗黙の姿勢だ。
彼ほどの『立場』にあるのだから、呑んで置いて他へ鉢を回す、という真似を取れるはずも無い。

「……大丈夫なのですか」
「問題ない。何より、帝国が傾くことで生じる多国間のバランスを考えれば、我々が動かずして誰が動くと云うのだね？」

『大義』。
彼の掲げる物は『責任』以上に、その立場に決して胡坐を掻いている者が発せられる言葉では無かった。
だが、マキナは知っている。
フラーという男が、どういう人格を備えているのかを。
これまでにも、教会内部で表沙汰にならなかった小さな悪事を、幾つも握り潰してきたであろうことも伺えているのだ。
「……危機に晒されるのは、何も我々に限った事でも無いのですよ？　其処はどうするのですか？」

なので、懸念材料を顕わとする。

どのように改宗を促そうとも、最終的に生きることへの選択と責任を強いられるのは其処で生きる帝国民である。
王国が差し出す提案には、ただ施しを与えることしか述べられていなかった。
その穴を、自ら突いたのだ。
自分で穿っておいてなんだが、マキナはこの提案乗るべきじゃないな、と思い直す。
王国の作戦、穴が多い。

「其処は問題無い。この話を道すがら聞いた時に、同じく『あるモノ』を聞かされたからな」

そう言って、フラーはある『数枚の紙』をマキナへ見せる。
訝し気にそれを受け取ったマキナは、王国外交員に断りを入れて、それらを検め出していた。

「……こ、これは……!?」
「『魔法の使えない農民』でも用意できる『自衛の武装手段』だそうだ。やり方は実に原始的だが、手間を惜しまなければ貧しい者らでも用意できる。それを、説法と同時に実

地試験を兼ねて広めてやれば良い」

草や蔦を絡めて攀じることで生み出せる捩じり縄。
木の枝を幾重にも並べて造れる木製の盾や甲冑。
木の棒の先端に汚物を塗れば毒槍が生み出せる。
狩った小動物の臓物を煮詰めて膠を造れる。
鞣した皮に膠と草や泥を付け乍ら石で叩けば、軽くて丈夫な革鎧を生み出せる。
それらを『伐採』で得るための『刃物』は、石を叩いて削るだけの『石器』で生み出せる。
本当に原始的な防衛手段だが、根本的に大々的な『戦争』に赴かせるための『戦力』を確保させることが目的ではない。
『自衛』を必要とする者たちへ、必要な分だけ自身で賄えるだけの配慮を、『知恵』を与えようというのがマキナが見せられた幾つもの『図案』の言なのであろう。
それを教会の信徒が先だって広めようと云うのだから、聴かないはずも無いだろう。
生き延びるための備えを教えようという者たちが、こぞって伝えてくれる方法だ。

「それにもうひとつ、我々にしか取れない方法だってある」

「……？　それは？」

「無論『保護』だ」

尚も訝し気なマキナ司教に、フラー大司教は得意げに語った。

戦えない生きられない、明日の食事も儘ならない女子供を、そのまま被災の地に残すことを教義は善しとはしないのだ、と。

本人たちの希望が重要だが、村々を巡りながらそうした弱者を引き上げて往くことを考慮する。

救うことを否定するのであれば、それこそ教義に反する否（イナ）、人の道として『間違えて』いる。

国家として間違えた方針であると云わざるを得ないのなれば、それこそ帝国へ反旗を翻そうとも執らなければならない手段である。

「……っ、それは、移民に当たるのでは……！」

「『移民』では無い、『移住』だ。我々が引き上げるであろう彼女らは、決して帝国の民であることを否定するわけではない。それに、食わせることに反した帝国が、『食い扶持が減る』ことを押し留めるわけも無かろう」

「な、なるほど……」

この数分で、マキナはすっかり大司教への見方を変えていた。

日頃から若い子女なんかに色目を使うなどの苦情を聞いているし、財政管理の立場を利用して私腹を肥やしていることはその肥え太った体型からも容易く推測できる。

だが大司教という立場になるほどに、信心があることは間違いが無かったのだろう。

他国の住民で在ろうと、創神教に与しない無信論者で在ろうと、命を救う事を違えてはいなかったのだ。

彼のような人物を大司教へ据えていた、教皇猊下の采配を疑った時もあった。

そんな人物の下に就けられて、日頃に不備の在る上司と、苦情を挙げてくる部下との板挟みとなって胃を痛める時もあった。

何か他大国との足並みを揃えなければならない事態に至った暁には、外交役としての立場も任されている彼が酷い不備を被って自国へも巻き添えを齎すのでは無いかと、益体も無い被害妄想に更けたりもしていた。

だが本日、初めて彼は大司教を見直していた。

王国の穴が多い多方面作戦の一翼を担う、という穴を埋めるほどの采配を示してくれたのだ。
しかも、信仰心と云う大義を抱えて。

マキナ司教は、知らず祈っていた。
この奇蹟を齎してくれた、他でもない人知の及ばぬ采配に。

――一方で、その遣り取りを一部始終見ていた王国の外交員は悟る。

「……（あ、これヴァヴランテくんの手口だ）」

姿見えないと思ったら、こんな人物唆して自分たちに優位になるように動いてた。
詳しくは知らないが、何かしらの『飴』をしっかりと提示し終えたのだろうなぁ、と諦観の念であった。

■

なんか連れ立つ外交員サンの目に呆れが見えるのじゃけども？
良かれと思ってやったのじゃー、悪気なんてないのじゃよー。

若干狐っ子な言い訳をしつつ、帝国外周のダームとかスィードとかクルトとかにもひょいひょい飛んで話を付ける。
まあこちらはホントに後備え。
なので話は早い。
大国それぞれの策が上手く嵌まって、帝国が『それ以上』の莫迦を晒さなければ、『役』に成らずに終えられる。
それでももしものための、ちょっとした報告・連絡・相談程度の『お話』だ。
働ける機会が在れば美味しい。
無いのなら無いで特に何もない。
本当はこんなこじんまりとした帝国周辺程度で騒ぐほどのモノでも無いんだけどねぇ。
他にも目を向けるべき地域があるはずなんだけど、其処まで思考割こうとしないのかね。

まあ小競り合いはヤリタイ奴だけにヤラセとけば良い。
お仕事はしゅうりょーっ！
俺、アールスハイドへ帰ったら、学生としてゆったりするんだ……！

アウグスト殿下とオブシディアス　邂逅編

「……もう一度、言ってもらえますか……？」
「ですから、帝国内部での各地領民らの同時多発的武装蜂起、コレはシュトローム様の仕組んだものでは無いのですね？　と」

アールスハイド王国に潜伏中の魔人・オリバー＝シュトロームの下へ現れたのは、金の髪を携えた豪奢な美女であった。
彼女の名はミリア、シュトローム第一の従者であり信奉者。
ある世界線では彼を陰ながら支援した、『いずれ魔人へなるはず』の美女である。
帝国に対しては貴族にも首都在住の帝国民にも一家言がある様子だが、件の『ある世界線』では彼女の出自は一切が明らかにされていない。
時系列的には孫に追い立たされたシュトロームが王国から帝国へ潜伏し直す『現在』にて、何処かの屋敷に匿っていた場面もあったのだが、どのようにしてそれらを用意できる立場にあったのかは不明なままである。
閑話休題（それはさておき）。

そんな彼女がシュトロームの定めた禁足を破り、帝国から王国へと姿を現したのは冒頭の理由である。

立場的に中等学園での臨時講師という役職に就いているシュトロームなので、某名探偵の孫作品の犯人らのようにやることが多い羽目に陥りながら王都外苑で待ち合わせることも出来た。

だが。

帝国転覆を目指すミリア並びに帝国斥候部隊の面々からすれば、帝国内で唐突に起こった内部騒動は見過ごせない事態である。

一向に実験の経過観察を終えることなく連絡すら入れてこないシュトロームに、暇を見つけて連絡手段を得ようと伝手を探るために、監視の目が厳しいであろう王国に入り込むには、少々余裕の無いことも確かなのだ。

よって、ミリアはシュトロームの知人だという『嘘』を発揮して、帝国から逃れて来た恋人のように振る舞い彼の居場所へと吶喊を掛けたのである。

堂々として居れば逆に疑われることも無い。

ファインプレーだぜミリアさん。

「武装蜂起……、帝国貴族に対して、領民が武器を取った、と……？」

それはそうと。

一概には呑み込めない情報を齎されたシュトロームは、思考が遅々として進まなかった。

彼もまた、帝国貴族の奸計に嵌められて領民に武器を向けられたひとりだ。

その点のトラウマを刺激されていることもあっただろうが、状況を把握するために思考することを辞めないのは研究者としての資質に寄るものが大きい。

だからこそ、彼の中には大きい疑問がしこりの様に燻ぶり続けている。

第一に、武器をどのようにして得たのか。

そして、貴族の武器である『魔法』に、領民の拙い力だけで立ち向かおうと思えたのか。

それらの疑問は、最終的に『武装蜂起は成功しているのか?』という点へと結びつく。

解消するには、推論だけでは足りない。

だからこそ、

「彼らの武装は、酷く拙いモノです。山や森から木々を伐り、それらを重ねたりして造った『貧者の武装』とでも呼ぶべき原始的な武装。武器も、魔法に対抗し切れない……と、

思われていたのですが……」
「……？　続けてください」
「……帝国の魔法技術ですが、どうやら酷く衰退していた様です。各地の武装蜂起は幾つも達成され、領民を虐げていた貴族らは次々と帝都へ逃げ帰っている、とのことです」

だからこそ、ミリアから齎されたその報告には、酷く驚いた。

■

「……教えたのは、直前まで各領地を巡察していたイース本国の司教らの様でした。自分の身を守るため、などという方便で、領民に禄でも無い知恵を付けッ、ギャアアアア!!?」
「ッこの、貴族の面汚しめがぁあああ!!!」

ヘラルドの眼前に跪いていた彼は、皇帝の振り下ろしたハルバードの一撃で瀕死に陥った。
謁見の間には悲鳴が響き、肩口から夥しい血流を噴き上げながら絨毯を血で染める。

狙った箇所は頭であったが、寸でのところで絶命には至れなかった様子である。
自分の粗い練度を曝け出すことはなく、ヘラルドは舌打ちを隠そうともせずにその貴族へ退出を命じる。
見ていられなくなった兵士が喚き続ける彼を引き摺って、謁見の間が漸く静寂に包まれた。

「領民の反逆なども鎮められず、おめおめと帝都へ逃げ帰って、イースの『巡察』を許可した私に責任を擦り付けるだと!?　自分の支配が及ばなかっただけではないか！　領民の手綱も握れずに、帝都の軍部をたかが暴動の鎮圧などに使ってやれるか！」

未だ悠気納められぬままに、『彼』が進言して来た『陳情』をヘラルドは切って捨てた。
魔法という格上の武装を得ているにも拘らず、貴族として平民に勝てなかった事実を、彼は同輩と認めることはできなかったのだ。
実際、これが成功し得るか否かと問われれば『出来る』。
戦事へ於けるヒトの備えるべき点は心・技・体、心構え・技術・身体能力、これは簡素に表しているが見事に順繰りでもあるのだ。
『闘争』は技術や身体能力の比べ合いだが、『殺し合い』に於いては一手で決まる。

狙った箇所を潰せるか否か。
命の取り合いを押し通せるか否か。
無論、技術も身体能力も、在って要らないわけでもないが、『緊急』に対峙した時の心理をどのように据えられるかこそが『命の奪い合い』に於いては重要なのだ。
其処で、今回の事態に関しては、直前に敷かれていた前提が生きてくる。
自分たちの働きを無視される、『尊厳』の軽視。
命を繋ぐための食い扶持を削られる、『未来』への絶望。
次々と手を変え品を変えて政策を狂わせられる、『信用』の割削。
帝国の采配に、自身らの生活を預けられようという期待は既に無い。
それは日頃から燻ぶり続けている感情ではあったが、其処を支援に廻ってくれた『他国』の者たちが介入したことが『理由』としてはずっと大きかった。

――他国の人間は俺たちに施すだけの余裕があるのに、帝国は俺たちに何も齎してはくれない。

そういう僅かな綻びが、『捨て身』ででも領主らへ一矢報いようという意気込みに繋がったのである。

幸いにも、イースの司祭らは自分たちの『弱点』に成り得る『戦えない』女子供などを一時的に避難として受け入れてくれることを約束した。
顧みることは何もない。
そうした桜花の如き特攻精神は、これまでに『弱い者虐め』にしか培えて来なかった帝国の魔法技術を大いに上回った。
拙いながらでも『武装』を得て、日頃の過酷な環境が『肉体』を造った。
例え『教育』に於いての劣勢があろうとも、『心』が折れなければ負けることもないのである。

――まあそんな精神論を持ち出すまでも無く、彼らが『負ける』ことは無かったのだが。
貴族らは何も丸裸で領地を経営（という名の搾取）をしているわけでも無く、先にも述べた様に『弱い者虐め』を買って出る程度にはそれぞれに自軍を控えさせている。
それらは基本的には外敵から平民らを守るための兵士になるのだが、今回の様に暴徒となった領民を鎮圧するためにも控えている。
しかし、それでも彼らは帝国兵なのだ。
上に従っていれば上手い汁を吸えるし、家族だって養える。

逆に下への対応は幾らおざなりでも問題視されることは無く、彼らが平民相手に『まともに』対応することには何用の補償も賄えて貰えないわけだ。
だから、彼らは自身らが脅かされるのならば『まともに』は対応しない。
今回の暴徒、武装蜂起もまた、国軍と云う『大戦力』が出張ってくれば直ぐに収まる。
そのくらいの気持ちで、危機に瀕して情けなく逃げて皇帝へ縋る貴族を追いかけて、領民への対応を放逐したのであった。

それが、本格的な危機へと明白になるのは、本当に直ぐのことである。

「へ、陛下！　領民の暴動は、ほどなく鎮圧されたようです！」

謁見の間に、駆け込んできた兵士からの報告に寄り、ヘラルドの機嫌は幾分か回復した。
得意げな顔となり、おお…とどよめく宮廷雀らを睥睨する。
「ふん。当然だ、たかだか平民らの暴動など、それほど続けられるモノでもあるまい。それで？　鎮圧に成功したと云うのは何処の領軍だ？　そ奴らには他の領地へも回らせ

ろ」
「そ、それが……」
非常に言い難そうに、しかし、彼は己の職務を全うするしかない。
疑念を皇帝が抱く前に、彼の発言は謁見の間に酷く響いた。
「て、帝国外周の小国家です！　ダーム・スィード・クルトなどの国境警備軍が、自分たちに降りかかる火の粉になるやもしれぬ、と身を挺して働いていただいたよう、です……！」
「なん、だと……!?」

■

「……何をしてるんだ?」
「あ、お兄さま」
アウグストが王城へ帰宅したところで、目にしたのは一種異様な光景であった。

王城の中庭にて、学園で使われている黒板よりもひと周り小さなそれに、幾つかの文章を書き殴っている少年が、自分の妹に授業のような真似を施している様である。

書いては消して、書いては消して。

文章が目まぐるしく変わって逝くそれは、自分たちが学ぶ魔法学院の高等学授業よりもかなり進行度が速い。

それをやる少年が緑を基調とした制服を身に着けていることから法経学院の生徒だと判ると納得だが、自分の妹であるメイがそれに付いて往けているのかとすると微妙に思えたのだ。

暫く見ていたアウグストであったが、弱音を吐かない妹がつい気になって、思わず声を掛けてしまっていた。

「というわけで光子は――と、今日は此処までにしますか。丁度集中も切れたでしょう？」

「あ。もう！　邪魔しないでくださいです、折角面白いお話を聞けていたのに！」

「ああ、スマン。……じゃなくて、何をしていたんだ、お前たちは？」

再度、問いかける。

きょとんとした貌を晒す少年は、シルバーブロンドに褐色の肌をした、何処か異国風の人物だ。

アウグストの記憶に、似た『誰か』が居た気がしないでもない。

「メイ姫さまのお兄様、ということは、アウグスト殿下？」

「ああ、その通りだが」

「いやぁ、初めまして。オブシディアス・ヴァヴランテと申します。メイ姫さまにはちょっとした青空教室を開催している関係です」

「どういう関係だ」

疑問、というよりはツッコミの様にアウグストは言葉を漏らした。

ヤーハハハと嗤う胡散臭さＭａｘの色黒白髪への、対処方式が定まった瞬間でもある。

判断が速い。

「いやぁ、姫様がお空を飛びたいなどと依頼してくるものですから。必要な技術的ハードルと知識と危険に関しての心構えを滔々と説くだけじゃ反骨精神しか養えませんか

らね、圧縮授業で基本的な所から森羅万象を教えてました」
「既にツッコミどころが満載だぞ……!?」

なにこの、なに……？
言葉の端からいきなり既知外の情報量を齎されて、果たして彼は何に関して語っているのかと怪しく思う。
日本語でおｋ、日本じゃねーや。

「お空を飛ぶには知っておかなければならないことがたくさんあるです……」
「メイも、何を言ってるんだ」

基本として、空中浮遊とでも呼ぶべきか。
そういった魔法は開発途上かつ研究途上の専門的過ぎる分野に置かれている。
それを宮廷魔法士でもなければ、魔法学院生でもないオブシディアスとかいう色黒白髪に、果たせられるモノかという疑念がアウグストには、まあとりあえず生まれていた。
ツッコミどころが満載だったが、言葉から主目的をなんとか見つけ出すことは彼には朝飯前である。

もう夕方だが。

「重力を振り切って第一宇宙速度へ到達することは必要不可欠ですが、それでは単なる射出にしかならないのです。大気への抵抗値の問題なども浮上するです。かといって無重力にイメージを置くと重力に従って惑星にとどまっている大気を拡散させるので呼吸との関連を視野に入れないと即座に酸欠状態に、」

「まって」

アウグストの語彙が死んだ。

姫様ストップ。

グルンと、メイ姫に向いていたアウグストが、オブシディアスに向き直る。

色黒白髪は変わらぬ笑顔で、ヤハハーと嗤っていた。胡散臭い。

「……なんだ。とりあえず、キミが専門知識を数多く備えていることはなんとなく見えたが、あんまり妹に過剰な教育は控えてくれるか……？」

「はぁ。問題提起までは押し込めましたので、後は解決法ですから。俺としちゃ構いませんがね」

「えぇー、答えを教えてくれないのですかー？」
「姫さま、独自の答えを見つけ出すこともまた、人生の醍醐味です」

なんだか本格的に胡散臭いことを言いつつ、お役御免を早くも確保しようとしていた。

ちなみに醍醐とは乳製品の祖であり、今でいうチーズかクリームのことを指す。

実物は在るだろうが、恐らくその言葉は通じない。

「……というか、普通にキミは何者なんだ。そんなあっさりと、妹の教育係に就いていたのかと思っていたのだが……」

それにしては安易に解雇を受け入れている、とアウグストは疑っていた。

しかし、その点はこの色黒白髪には、特別詮の無い事情である。

「元々そういうわけでも無かったので。というか、俺は普通に学生なので、キチンと学校に行きたいですよ。びばすくーるらいふ」
「び、びば？」

クソみたいなコメントを残しつつ、彼は王城より去っていった。
数日後、魔法学院の特別講師として再会するのだが、――それはまた別のお話。

這い拠る混沌モドキの愉しい魔法講義　愚痴り編

「……なぁ、ちょっと愚痴って良いかな」

オブシディアス・ヴァヴランテの、妙に沈痛な呟きが教室に響いた。

然程も騒然としていたわけでもない。

かといって、静かな一言が響くほど静寂に包まれていたわけでもない。

しかし、彼の言を聴き洩らさないように、と誰しもが耳を傾けている中での、常に笑顔の絶えない少年の神妙な表情と共に漏らされた一言は、水面に打った滴の様に良く利いた。

絶やさない笑顔は胡散臭い程に野趣と暴虐に傾いた代物だったのだが、其処はご愛嬌と云う奴で言わぬが花だ。

「俺はこの国には遊学のつもりで来たんですよ。大国ですし、文明水準や倫理水準を測るには丁度いい指標になりますからね」

のっけから、一般的には理解が難解な概念で始まり、早々に誰しもが疑問符を浮かべていた。

ちなみに『のっけ』とは西日本の方言に当たる、『物事の初め』という意味を持つ。どうでもいい情報だ。

「測るための一手として遅延さは不可欠でした。喩えるならば、コーヒーに一滴一滴ミルクを滴らせ徐々にカフェオレへ変えて往くかのように。即ちパラダイムの更新に当たる真似に至らないように、と慎重に事を進めることは必須なんです。進行してしまった事態と云うモノは引き返し様が無く、変化というモノは不可逆なのが世の常です。何より、変化に至らないモノにも価値というモノはそれなりに備わっているものですし、無理に新しくしたモノが良いモノに換わる保証はありませんから」

銀の車輪とか呼ばれてる秘密組織みたいな、実証実験の様なことを滔々と語る。

つまりは『ジャガーノートによる世界崩壊』というある娯楽小説に准えた例え話なのだが、詳細を既知とする者は此処には居ない。

居ないので、その辺りの概念に対するこの色黒白髪の抱える懸念は、聴衆の疑問符の中へ無為に溶けて通じることは無かった。

意味は通じずとも、講義に耳を傾けていたひとり、オリバー・シュトロームは興味深そうに頷いていた。

感慨深いものがあったのだろうか。

そいつ、アンタの策を割と台無しにした張本人ですよ？

「ブルースフィアの物価情報を明け透けにしたのも、この国の対応力を計るためです。問題点は、その時に魔法に関しての個人的な研究結果を漏らした事でした。同時に捌けないことを把握できずに問題点ばかり挙げられたら、そりゃあ誰だって身動き取れなくなりますよねぇー……」

遠い目をしながら、「それが誰も気づいてないことだとは思って無かったのだものゴメンナサイ」と懺悔の様に目を逸らす。

言葉〆が小声なのは後ろめたい為だろう。

正論突かれて詰まるヤツは間違えていることを自覚しているからだ、ってジッチャが言ってた。

違うか、違うな。

実際、謝罪も吐いていたわけではあるが、聴いていた生徒らは内心穏やかではいられ

ない。

それが、先立って宮廷魔法士団より発表された、『魔法使用に準ずる魔物発生への関連性』に至る物だと誰もが気づいたためである。

えっ、つまり魔法を使えなくなったのは、此奴が犯人……？

生徒らの行き付いた感想が軒並み此れである。

特にリン・ヒューズなんかは視線がヤバイ。

無表情ながらも、彼の邪知暴虐を許してなるモノか、と瞼の強い眼差しで色黒白髪を睨みつけているのがわかった。顔こっわ。

「まあそんなわけで。問題点振っちまった身なので、これこの通り、国からの仕事を割り振られれば応じるくらいには反省してるんですよ。でもね、」

ひと呼吸、間を置いて教室を見渡す。

アールスハイド魔法学院の、Ｓクラス並びにＡクラスの面々、そして魔法の基礎を語るということで招聘された中等教育学院の幾人かの教師らが視線を集中させていた。

「最近の俺、働きすぎじゃないですかね？　学生なのに、新入生なのに、もう一か月も経

つのに、学校に通えてない気がするんですけれど？」

そんなの、此処にいる面子が知った事ではない。

ちなみに。

オブシーの最近の行動を検めると、城勤めの国家代表外交員らを引き連れて帝国周辺国並びに神聖国と商業国への移動要員として2週間。

（本当はもっと速くに事を進める必要があったが、城内の意見と王国代表以外の人員の必要性を要求されて極少人数での移動に異議を申し立てられた。序でに各国外交員へのアポイントメントを取るため、それぞれの国で数日ずつ拘束された。『一手目』としての商業国入りは早々に為せたが）

王国へ戻ってからは宮廷魔法士団の『研究』に付き合わされて、午後には初等学院から帰宅したメイ姫への私塾を開設されて2週間。

（魔法の、というよりは魔力のコントロールに重点をおくべき、という教えを賢者から受けた宮廷魔法士団の、研究という名目の訓練に付き合わされた。正直『方向性が違う』ので、生来の『お人好し』を発揮して廃魔力生成に至る『攻撃魔法』への対抗措置としてのイメージ矯正を指導。メイへの講義は『その後』になるので、アウグストに止められる頃には圧縮授業になっていた。）

正直、割と寝る暇も無かった。
そのうえで、本日のコレである。

「――。特に意見も無いですか、そうですか。
はい。そんなわけで特別講師のオブシディアス・ヴァヴランテです、ふれんどりぃにオブシーって呼んでね！」

そんな感じで、彼の魔法学院での特別講義が始まった。
自棄になったかのように、ギラギラとした笑顔で。
本来、笑顔とは攻撃的なモノであるというが。
納得の、何処かの武器商人がフフーフと嗤っていそうな顔付きで以下略！

■

はい、講義しゅうりょーう！
閉廷！　解散！
……ほんとにわっち、最近働き過ぎでありんせん……？

間違った知識で正しい答えを発揮されるのも危ないので、日本の義務教育に則った『理科』をとりあえずぶっこんどいた。

『燃える仕組み』から『排出される物質』なんかの例え話はマークという少年の実家が鍛冶屋だったので理解が速かったが、『火の状態』に関してまでは把握していないようだったので、鍛冶工房知識っぽく熱の伝播に関しての例えに准えてパラケルススの定義した四大別離へ推移を、って詳細は良いか。

まあ分子の結合や乱立やら稼働状態なんかを精霊っていう概念に置き換えて説明した、とでも言っとけば良いか。

……今更だけど、前世くらいの魔法理論も割かし科学としては間違ってるな。あそこも魔力っていうのが概念じゃなくて物質で通じてる世界だし。

――この話止めよう！　ハイサイヤメヤメ！

気になるのは、実証の段階で火の魔法を使わせたときに、なんでか青い火を造った子がいたことだが。

燃焼物にエタノールでも混ぜてんのか、と呆れて訊いたら凄い驚いた顔をされた。

ちなみに、その子はそれが『高温の火』になると勘違いしていたらしい。

ならねーよ。それなら鉄を鋳溶かす高炉内とか、それこそ太陽だって蒼くならぁな。

と説いたら羞恥からだろうか、頭を抱えていたが。

……これだよ。

魔法は『勘違い』の知識でも『結果』を捻り出す。

成功するから良いか、とは見過ごしちゃいけない。

過程が違う物を無理に押し通すなら、それの『皺寄せ』は絶対に何処か変な場所に生じるんだ。

そしてそういう奴は一見して見つかる物じゃ無いから、因果が何処に繋がっているのかが本当に『わからない』。

アレだ。

某大統領のＤ４Ｃラブトレイン。

要するに、そういう『傍迷惑』が、絶対的に何処かに流れ出るモノなんだよな。

俺はそれを『魔女の講義』で知った。

ちなみに、攻撃魔法以外に関しては、検証の結果『禁止令』を解かれたご様子。

まあ本格的に禁止にされたら、王国内でクーデターを引き起こされかねないからね。

便利さに馴染んだ人間は、易々と苦労を強いられる環境、例えば原始的な生活へなんかは戻りたがらないのが当然ですし。

俺はそれを『雲の王国』で学んだ。映画版は名作揃いだよな。

「ちょいと、良いかの？」

「はい？」

久しぶりにドラ●もんの映画を見たくなってきた衝動に駆られつつ、神聖国に避難した帝国農民なんかも帰りたくなくなるだろうなぁ～などと推測していると、お年を召した男女の片割れに声を掛けられた。

授業参観みたいに生徒らの後方に陣取っていた方々の中に見た顔ではあるが、現役採用を形としている様子の魔法学院の教職にしては歳を喰い過ぎている。

学院長とか、その辺りの人だろうか。

「儂はマーリン・ウォルフォード、こっちはメリダじゃ。いや、中々面白い講義を見せてもらった、良く研究されておるのぅ」

「。ああいえ、恐れ入ります。そうですか、貴方が」

一瞬、佇まいを変えるべきかとも思ったが、名乗りからして貴族でもないので態度を

変えることはない。
それに対して何を云うわけでもなかったので、極めて自然体に。
しかしそうか、このヒトも相応に権威ではあるのだから、魔法学院に視察にくらい来るか。
宮廷魔法士団にも、先日方向性違えども指導に来ていたっぽいし。
「……あ。そうだ、折角会えたことですし、ちょいと聞いておきたかったことが」
「フム？　なんじゃ。儂で答えられることで在れば、なんでも構わんぞ？」
「では失礼して。――先日、魔法士団に魔力制御についての指導を行ったと聞いたのですが、」
気にはなっていたんだよね。
根本的に方向性の違う指示はさておいて、
「魔力制御の重要性に於いて、賢者様が要点を置いていると云うのであれば、何故それを大々的に教導していなかったのでしょう？」
「フム、……ッ!?」

ん？　あれ、俺可笑しいこと訊いたかな。
なんか、教室の空気がスゲェ静まり返っておるのですが……？

「こ、コラ、オブシディアス、賢者様に何を訊いてるんだ、キミはっ」
「あ、カートくん。なんかお久。いや、失礼は承知での質問だったんだが、構わないとも言質は取ってるよ？」
「しかしだな……」

小声で顰めるように、彼は賢者様に敬意と云うか、立場を尊厳的に見ている節がある。
貴族だというのに、英雄とはいえ平民への態度とは納得がし難いが、その辺りは『この国の在り様』に繋がってくるのかね。
で、そちらのメカクシ眼帯の褐色肌のヒトは、いったいどなただね。

「横から失礼、オリバー・シュトロームと云います。中等学院の臨時講師と、カートくんの家庭教師も指導していました。先ほどの講義、見事でしたよ」
「そりゃどうも」

シュトローム、ね。
帝国貴族っぽい姓名だけど、カートくんの例もあるからなぁ。
早計は控えるか。
しかしデジャヴを感じる。
何処かで会ったかね……？

「それで、先ほどの賢者様への問いかけですが、失礼ながら私見を答えてもよろしいですか？」

目の向き、というか顔の向きが賢者様へ傾く。
横の導師様に脇を小突かれて、咳払いで頷いた賢者様に礼を返し、シュトロームさんは粛々と答え出していた。

「――では。推測ですが、賢者様は己の知識を悪用されないように、とその訓示を体現しているのではないのでしょうか。より強力な魔法が発達すれば、先に待っているのは制御を振り切った暴走に至る、と。そういう末世に成り得る自体を想定して、あの方は自

粛しているのでは、と」

「へぇ」

鼻で嗤う。

でもそれってＹＯ！　俺の講義総じて無駄、って言って無い!?

というか普通に帝国流の、知識の取り扱いに関する制限論法だな。

完全に帝国貴族の思考じゃねーか。

さては帝国メタクソにしちゃったのを恨んでるなコイツ～？

「それを先立って未遂に終えるための『教育』なんですがね。幾ら住みやすい国家を造ろうと、国ってのはヒトの群れですから。悪用されるような低劣だと云うのならば、それこそ先立って教育に手を出さないと。倫理観並びに知識の水準を引き上げれば、シュトロームさんの『懸念』も無いままでしょうよ」

政治家に最初に得て欲しい技術を挙げるなら、人心の掌握とかではなくて状況に対応するための『盤を見下ろす』視点だろうね。

問題解決のためには、先ずは状況を把握できなくちゃ意味が無い。

俯瞰することすら出来ずに『先を読む』なんてできるわけがないんだから、そうした視野狭窄を防ぐために必要なことこそが『教育』の一端に繋がるわけだ。

民主主義は国民全員に国家の主になるべく、その『教育』が施されるのが前提だ。

全体の水準を引き上げれば、それこそ倫理に反することを平然と見逃せるようにはならないわけだから、自然と締め付けだって極まるのだろうけど。

改めて見ても民主主義って国民に厳しい政治だなぁ、その分『自由』も有るけどさ、『責任』を伴った上で。

シュトロームさんの懸念は、つまりはその辺りの『知恵を伴えない環境下』に居るであろう平民が手にした知識（武器）で何を仕出かすのか、ってことだろう。

俺の返答は其処の『前提』を覆すだけの対応力。

それが国家自体の話になってくると、やっぱり先立って望んだ『俯瞰視点』が重要で、話が見事にループするのだが。

あとは、外患誘致を防ぐ、くらいかね。

まさに俺が帝国にやったことだけど！

「……キミは、」

アッハ、とやっちまったことに対しては、まあ笑って済ませるとして。
などと口遊んでいた俺に、何か思うところでもあったのかシュトロームさんが茫然と見下ろしてきている。
つーか、目ぇ見えてるっぽくない？
メカクシ眼帯に小さい穴とか空いてるのかも。
単に明るいところが駄目なヒトかもな、グラサン替わりに見えて来た。
若干取り留めも無いことを思考している丁度そこへ、教室外から声が掛けられた。

「失礼。オブシディアスくん、講義は終わったか？」
「おりょ、オルトさん。どうしました？」
「王城から緊急の呼び出しだ、キミの予見した通りの状況だそうだ」

情報の取り扱いに関しては、言葉少なめを希望して事前通達を施してある。
個人的に王国側へ配慮している。
信用していないわけでは無いけども、下手に事件性疑われて騒がれることも、誰だって望むものでも無いだろうっていう計らいもあるわけで。
しかしなぁ……、

「毎度毎度思うのですが、俺の呼び出しに警備局の捜査員であるオルトさんが宛がわれてるのは、どういうことなんでしょうね……？」
「ハハハ。用件は以上だから、早めに向かうようにな」

おい待て、質問に答えろ。
青年は爽やかに笑うと、本当にそれだけだったのかさらりと立ち去って行った。
要件の内容自体は彼も聞いていなかったらしい。
まあそれでも良いのだけど。

「ヴァヴランテ講師、王城から招聘されたと耳にしたが」

去っていったオルトさんを引き留めるべきか苦悩する間もなく、先日顔を見知ったアウグスト殿下に呼び止められる。
しかし入れ代わり立ち代わり、対応がめんどいなぁ。
立食パーティじゃねぇんだぞ。
同時に話を振られた聖徳太子状態じゃないだけまだマシだが。……イエスキリスト

だっけ？

「オブシーで構いませんよ。まあ基本的なお仕事の場所って其処ですし」

「……あの後も各箇所でキミの話を小耳に挟んだが、キミの仕事とやらがこれ以上王城にあるのか？　メイの家庭教師も宮廷魔法士団の訓練も、キミの手を離れているだろう」

おおぅ、疑いの眼差し。

信用が無いっぽいのは個人的関係が薄いのだから仕方が無いとして、この様子だと王様からも詳細聞いてないって感じかな。

機密の隠蔽がしっかり出来た王様だぁ。

――まあ、疑われて動けないよりは、マシか。

「『帝国が進軍を始めたら呼んでください』って言ってあるんです。だからまぁ、一種の緊急事態ですね」

「な……っ!?」

判断して、さらっと説明。
教室中が騒然となった。
どいつもこいつも、聞き耳立て過ぎじゃなぁい？

「宜しければご一緒します？　課外授業ということで、お連れしますよ」

ちょっと戦場まで、逝こうぜみんな！
少年漫画の主人公っぽく、オブシディアスはキメ顔でそう云った（ドヤア。

帝国を迎撃せよ！

『これは聖戦である！
我ら帝国領民を脅かした、自称神聖国家への神罰の代行！　奴らの思い上がりを矯正するために、我らブルースフィア帝国軍は手始めにダームを討伐する！
彼らは神の代行を詐称するイースのケモノドモに連なる宗教国家であり、駆逐すべき悪であるためだ!!!』

――と、そんな宣誓が帝都で挙げられたらしい。
意外と早かったな、というのがこちらの感想だ。
農民一揆で領民からの反発を各所で喰らい、それを制圧するために帝国軍や、最低でもそこいらの領軍が稼働することくらいは想定していた。
いたのだが、思った以上に怠け者であった彼らが動く前に、事前に通達していたクルト・カーナン・スイード・ダームの帝国領隣接国家が、対岸の火事と見做さずに鎮圧に乗り出してくれていった。

そもそもは、反乱と暴動を働いた領民らが、悪感情を向けていたのが帝国そのもの。
他国からの内政干渉と見咎めようとするのは国の上層であって、他国へは武器を向けるべき理由が領民には無い。
『だから』鎮圧も比較的緩やかに、容易く終了したのだけど、問題は其れでは終わらなかった。
他国に鎮圧された平民らは、再び帝国に属することを受け入れなかった。
彼らは自分たちの処遇を、鎮圧に乗り出した、つまりは『相手として』見てくれた他国の国境軍に陳情を申し出た。
『自分たちをそちらの国に所属させて欲しい』と。
それを物理的に制限させようとする主導者、つまり領主らは其処には居なかった。
そのために、仮にとはいえ平民らの言い分を聞く耳を備えている各国は、帝国へ対して彼らからの陳情を受けた上で、彼らを受諾した。
帝国領が、削り始められたのである。

認められる帝国では当然無い。
しかし、其処に生きる者たちが帝国に不満を持ち、再び帝国民として搾取される側へ戻ろうとは思うわけが無い。

帝国側は各隣接国家へ領地と領民を返還するように命令したが、国としての脆弱性を露見させてしまった帝国の横柄な対応をまともに取り合うわけもない。

隣接国家らは、返還に当たっての受諾公約として鎮圧にも掛かった戦時費用、並びに帝国領民に支払うべきと見た莫大な賠償金を申請したのだが、帝国はそれを支払う意志を見せずに宣戦布告に至った、というわけである。

理由としては、暴動を起こした農民らへ信仰を促した神聖国家が元凶であるかのように吠えたわけだが。

大穀倉地帯であるクルトに、羊毛織物の一大産出国であるカーナン、それらの目立つ交易に隠れてしまって『古い国』という印象しか残っていないダームから『先に』潰してしまおう。

そんな意図が透けて見えている。

国家としての斜陽が、そのまま軍力の低度にイコールで結びついてしまって、組みし易い国とでも穿ったのかも知れんね。

同じく国力の低さを国土の少なさで比較されて目立たないスイード王国なんかが狙われる可能性もあっただろうけど、そちらは仮想敵国であるアールスハイドにも隣接している。

将来的に侵略対象である王国に真っ先に動かれることを懸念して、大義名分が通しやすいイースに連なる宗教国家から潰そうとか、そんな意図だろう。

帝国が『もう少し』決断が遅く、『もう少し』我慢を利かせられていたら、今回の各帝国領地での暴動はもっと連鎖的に拡大していったはずだ。

返還費用を支払うにしても、こうした『成功』を知ってしまった帝国領民らは同じように動き出していただろう。

それを繰り返すうちに、帝国領の削り取りは引き返しの付かないレベルにまで突き進んでいたと思われる。

若しくは、帝国が心を入れ替えて、平民への待遇を改善していたら、このような反社会活動の乱立も鎮火されていったのかも知れないけど。

……まあ、無理な話だよね。

それができていたら、そもそも『こう』はなっていない。

それができるんなら今からでもそうしろよ、っていう話だし。

「――まあどちらにしても、事此処に至っては最早彼らに選択肢も無いんでしょうね。今更平民を対等に扱うことも、他国へ自粛することも、帝国貴族の高まり過ぎたプライ

ドが邪魔をして真っ当な国政すら選べない……」

と、説明してて気づく。

へい聴衆、返事しよーゼ？

「そ、そんな呑気にしていられるか……」

「てっきり国内かと思っていたら、外国で、しかもその日のうちに連れて来られるなんて誰が思うってのよ……!?」

力無く呻いた王子と違い、着いてきた魔法学院生の赤髪の少女は勝気に文句を言う。

確かマリア＝フォン＝メッシーナだったか。

着地直後に口が利けるなら充分元気、ダイジョウブダイジョウブ。

「敵兵と間違えられるのも嫌ですし、ダーム国境兵にしっかりと挨拶しときましょうかね。皆さん市民証の準備は宜しいですかー？」

遠足の引率になった気分で、ダーム国境にまで連れて来た幾人かを急かす。

体調的にも強行軍だろうがサクサク進もう。
未だ帝国の進軍は到達してない様だけど、先立って襲撃を受けた元帝国領の幾つかの村では食料や畑を焼いたり井戸に毒を流したりと既に抵抗戦略を強いてるっぽいのだし。
大変なのは当事者なのだしねー。

■

マリアさんがオブシディアス（正直同年齢を『そう』呼ぶには違和感が強いけど）先生へ食って掛かることを華麗にスルーして、ビザはお持ちですかァ？などと何処かで聞き覚えがあるような無いような発言でダームの国境へ向かう。
飄々と引率されて、少しだけイラっと来た。

「……シン、ヴァヴランテ講師の使った魔法、どういうものだったのかわかるか……？」
「わかる、ことはわかるんだけど……、俺には多分、再現できないな……。イメージが、繋がらない……」
「……賢者様なら、どうだ？」

「……じーちゃんにも難しんじゃないかなぁ、後で訊いてみるけど、とりあえず、あんな移動魔法を使えたのなら今あんなにふらふらになってないだろ」

オーグが小声で訊いてくるので、こっちも気持ち小声になって返す。

視線の先では、ディスおじさん達の中に埋もれて青い顔をしたじーちゃんやばーちゃんなんかが目に見える。

訊かれたことは案の定、オブシディアス先生の使った『移動魔法』についてだった。

説明不足だった、わけじゃない。

王城から此処に、テンポは早かったとはいえ会話もあった。

向こうが俺のことを覚えていなかったのは、ちょっと納得いかなかったけど。

とにかく、じーちゃんやばーちゃん、見学に来ていた中等学院の先生やウチのクラスメイトに、講義を聴きに来ていたカートくんまで。

揃って王城へ向かって行って、対策がどうのと尋ねて来たディスおじさんも引き連れて、俺たちは揃って此処にまで到着した。

大体、1時間くらいで。

……ダームって、王国から見たら何処らへんの国なんだ？

「なあオーグ、俺よくわかんないんだけど、ダームって王国からどれくらい離れてるんだ？」
「ああ、シンは確か初等教育も受けて無いんだったか……。ダームは王国の隣であるスイードの更に隣だ、王国からだと、そうだな……馬車で3日から5日といったところか」

うわぁ……、普通に規格外なことやってるよ……。
そもそも、移動手段が馬車な世界で空中飛んで、ジェット機みたいな速度で来るのがおかしいって。
文化のどうのこうのって、さっきも口にしてなかったか？　お前のやってることなんなんだよ!?
其処はまあいいとして、移動魔法に関してか。
手順は、王城で先生が一つずつ説明して貰えたから、思い出すこともできる。

『まず全体を範囲で括り、そうですね、鎖か何かで繋げましょう。手を離しても問題は無いですが、心持ち安全に配慮をということで』
『次に範囲内を亜光体へ変換します。この状態ですが、正式な光子ではなく光子と同等の状態を維持するための便宜上の状態であり、正確には『なんなのか』までは俺も把握

してません。しかし気圧の差、空気抵抗による摩擦、大気中の遮蔽物などの『状況』を透過するためには必須な変換でありますので、絶対に踏襲してください。ちなみに『光そのもの』に変換してしまうと『拡散』の懸念がありますので、初めはナマモノではなく小石や丸太なんかで練習すること』

『最後に風魔法の噴射による飛行に移るのですが、この時周囲への影響を決して忘れないように。僅かながらの気流が反動を生むのは仕様ですが、時速に計測して最低でも2万キロ以上、それくらいの速度を発生させる速射魔法ですので。反動を推進力へ転換するイメージが出来ないのならば、周囲にヒトの居ない状態でこそ使用することを心掛けてくださいね』

『センセー、ジソクニマンキロってどのくらいのスピードですかー?』

『大体1時間で2万、あー、伝わり辛いですね。瞬きする間に王都を横断するくらいだと思ってください』

『!?』

あ、途中アリスの質問が混ざった。

というかあのひと、絶対に転生者だろ……っ。

ムチャクチャやるなよ、何考えてんだ!?

……とにかく、聞く限りでもふたつかみっつの魔法を同時に展開していた。
俺でもせいぜいふたつまでだよ。
先立って教わった『廃魔力への懸念講義』とかを省みても、全く魔力漏れも感じなかったし。
まあ、それを実践したお蔭で、不満そうだったリンとかのクラスメイトは納得したようだけどさ。
『頭でっかちの法経学院生に魔法の何を教わるんだー』ってぐちぐち言ってたもんな。
本人は騒いでいなかったのだけど特にゴールデンクラッシャーのシシリーさんなんかが、何を仕出かすのかってちょっと恐れ多かった。
実際には、始まってから終わるまで、ずっと静かなままで拍子抜けしたんだけど……。
アレ？　シシリーさんってあんなに美少女だったっけ？　カートくん相手に『潰した』イメージが強くってあんまりちゃんと見たことなかったけど、改めて見ると可愛らしい気がする……。
「……とりあえず、賢者様を超える規格外だということはわかった。そうか、父上も、なんやかんやと呼びつけては国の仕事に関わらせるわけだ。敵対なんてしようものなら、絶対に禄でも無いことになるな」

「い、いきなり敵対を考えるのか？　索敵しても、欠片も害意なんて持ってないぞ？」

思考が変な方向へ向きかけたけど、オーグの言葉に思わず動揺する。

だけど、オーグの懸念は間違いじゃないって、この後で直ぐに判明することになる。

今は其れには気づかず、俺は疑問を口にするだけだった。

「……ところで、戦場だって聞いたんだけど、俺たちやディス王様おじさんまで引き連れてきて良かったのかな。まさか戦力として連れて来たとか、そんなわけじゃないよな……？」

「……流石にそんなことに許可が下りるわけ、ないだろ……？」

■

「こんにちわー、ラルフさーん。見学に来ましたー」

「……呑気かね、キミは」

戦時の緊急事態だと云うのに、ふらりと現れた褐色肌の少年にラルフ＝ポートマンは

顔を顰める。
足早に技術指導を受けた恩があるとはいえ、王国の人間までぞろぞろと引き連れて『見学』と云われたら、そりゃあこんな貌もする。
他国の介入があることは見咎められるし、自分たちの士気にも携わる。
なので『参戦』と云われないだけマシなのだろうが、のほほんと首を突っ込まれるのも誰だって嫌なモノは嫌である。

「技術指導やったじゃないですかぁ。仕上がりを確認するっていう名目で、おひとつ見させてくださいよぅ」
「『名目』って言ってしまってるじゃないかキミ」

呆れたが、恩があるのは確か。
色黒白髪本人は帝国領民が一揆を興した対処として口出しをする代わりにと、新技術と銘打って武装を売り付けに出したに過ぎない。
しかし其処の僅かな信用の天秤が、日頃は厳格で知られるダーム軍司令官のラルフの緊張交じりの心情を緩ませていた。
あざとい、流石色黒、あざとい。

「まあ良い、好きに見て居たまえ。射線上の前へは出るんじゃないぞ」
「はーい」

開拓が済んでいない荒野と森林を正面に見据えて、ダーム軍が銃列を敷いている。
彼らが手にしているのは剣や槍などではなく歪に伸びた木の棒で、そのどれもが魔道具だ。
色黒が配した、使い手の発動させる『着火の魔法』で尖端に生じさせた火球を『送風魔法』で発射させるだけの魔道具。
これの仕上げを、彼は観察に来ていた。

■

――結果は、上々に終わった。

「消火ぁーッ！　急ぎ火を消せー！」
「山火事になるぞ！　チクショウ誰だこんなもん配ったのは!?」

「こんなもん戦争じゃねぇ！　帝国兵が炭になっちまった!!!」

……どうしよう。

『火ィ付けるのは気持ちが良いなァ』とか、某ノッブみたいな科白がとても吐けない。

流石に俺だって自粛するよ？

というか、火災旋風の規模までは計測してなかった。

仕組みとしては、基本的に無手で魔法を扱えるこの世界の自流に敢えて逆らって、着火を杖の尖端に使わせる訓練を説いた後に、『撃ち出す』形式の送風魔法を付与した魔道具でバキュン。

普通の火魔法が１０メートル飛ぶか飛ばないかの飛距離なのに対して、風速４０の風魔法での『併せ』で飛ばすので秒速５０メートルにも届かない。

しかし山なりに放物線を描くように撃ち出すことを指示してあったので、弾丸よりは弓矢の方が彼らのイメージになっていただろう。

攻撃魔法も、放物射撃の方が飛距離を稼げるんだろうがなぁ、なんでこの世界の魔法って『射程』を考慮してないんだろ。

で、一発一発は普通に火をぶつけるだけだが、ああして多重に合わされば、生じる熱で上昇気流が発生して。

……売り出すには使い方をキチンと教えないと売れないなぁ。

「……オブシディアス、此れが、キミの与えた『戦略』かね？」

魔道具特許で悠々自適生活は夢のまた夢、と反省していると、ディセウム陛下が。

うん、やりすぎちったね☆

とか、ふざけられる場面じゃねーな、うん。

「いやぁ、迎撃として武装を施したくらいなので、こんなになるとぁ」

「……攻撃魔法を注意した、その口でかね？」

「とは言いましても。今回使ったのはどれもこれも生活魔法の域を出てませんぜ？　攻撃の意図は魔法にも魔道具にも施して無いので、組み合わせで。魔法ってコワイね！」

若干、呆れも含んでいる感じの視線――☆

待ってくれ、これは帝国兵が真正面から進軍して来たことが問題なので在って、俺が武装を配したことは別問題なのでは？

オブシーはそう提訴するよ。俺は悪くねぇ！

「……とりあえず、あんな強力な武装を他国へ売りつける、というのは流石に看過できん。せめてこちらにも融通を利かせて貰えないことには……」
「え？　初めから、『それ以上の魔法（兵器）』に関しては皆さん見てますよね？」
『え？』

成り行きを見守っていた一同から、同音の疑問符が。
……皆さんも見ていたでしょうー？　あの移動魔法、どんだけぶっ飛んでると思ってんのよ？

遊んだらキチンと片付けましょう

「こんなの、どうすれば良いと云うのだ……ッ！」

ブルースフィア帝国宰相、大元の世界線（原作）でヘラルドに進言して斬り捨てられた人。再登場。折角なのでそれっぽいネーミングをおーりが付けました（勝手に。ヘイドン＝フォン＝アヴァランチは懊悩する。

帝国領民の暴動に反乱、そこから雪崩れ込む様に発展していった皇帝ヘラルドからの創神教へ対する宣戦布告。

そして、敗北――。

組みし易い、と目論んだダームへの侵攻が、一方的な蹂躙で以て戦線を収束『されて』しまったのだ。

報告に上がるのは帝国兵の被害ばかり。

皇帝が購入し配備した新武装（ハルバード）を、披露する暇も無く彼らは敗北を喫してしまっていた。

ヘイドンが懊悩したのは、その結果についてのみではない。

彼が充てられてしまった、今の立場こそがその意図を物語っていた。

「……皇帝閣下『代理殿』、采配を願います。我々では、如何ともしがたいのでして」

「わかっておる！　わかっておるわゼスト！　クソ、なんでこんなことに……ッ」

代理と、銘打たれたモノの、その立場は帝国の最上位に値する。

誰もに崇められ、羨まれられて、支配を振り翳せる立場へ座したと云うのに、彼の言は非情に力ない。

それもこれも、ヘラルド皇帝が戦線に於いて崩御した為だ。

皇帝と云う立場に居ながらにして、侵攻の最前線に赴いて命を散らした為だ。

その命を守ることを出来ずに、帝都との交信役として後方配備された斥候部隊が、ヘラルドの死を届けてしまったが為だ。

他にも齎された戦線からの報告は、決して帝都にて控えていた貴族らには受け入れ難いモノであったが為に。

ヘイドンは『皇帝代理』という立場に、収められてしまった。

彼の苦悩は、ここから始まるのである。

■

当初の予定では――、

「(――シュトローム様が魔物を増やし、侵攻作戦で手薄になった帝都を蹂躙する。確か、そんな話だったな)」

帝国貴族、並びにブルースフィア帝国の采配に於いて、犠牲となった尊厳や命は非常に膨大だ。

ゼストやその部下らもその類に漏れることはないが、オリバー＝シュトロームの帝国へ対するヘイトはそれらを併せた熱量よりも遥かに重く感じる時がある。

だからこそ、彼ら帝国軍斥候部隊はシュトロームの作戦に乗り、『人間を辞める』覚悟まで決めていたのだ。

だが――、

「(魔物たちが蔓延る暇も無く戦線は崩壊、ヘラルド皇帝は『巻き込まれて』焼死した、と部下たちから報告があった。シュトローム様とは連絡が付かない様であるし……)」

斥候部隊の役割は情報収集。
帝国軍部ではそう教えられてきたからこそ、彼らは己の職務を忠実に熟す。
魔人へ変じることも無かった技量（レベル）では、地獄のようであった戦線から生き延びることしかできなかった。
そう報告も入っているし、何より、報告してくれたフィンは『炎の竜巻』の『余波』に晒されたことで、今も生死の境を彷徨っている。
戦線から生き延びたのは彼だけだ。
無論、他の斥候部隊の面々は基本として後方配備（とされていたので）、主流部隊員らには不備は無い。
しかし、

「（『逃げる』ことを専門に鍛えていたからこそ生き延びた、そう見る者も居るだろうな。どちらにせよ、）」
「ゼスト……、本当に、皇帝陛下は崩御為されたのか……？　貴様の、間違いというわけではないのか……？」
「（我らの面子は丸潰れだ）確かと、報告が入っております。皇帝陛下は、兵士らを鼓舞

するために戦列を率いて侵攻を開始していた、と」

居合わせている貴族らが苦悶の声を上げた。

それが悲しみに暮れた感情からではない、ということが、ありありと透けて見えた。

そもそもが、帝国皇帝という立場の者が、宣戦布告を示したからといって最前線に赴くことが不適切だった。

憤りを示す、正義があると吠える、兵を鼓舞する。

どのように理由が在れど、『大国の主』が政務を放り投げて戦いの最前線へ向かうことは、国民にとっての不義としかならない。

戦線に於いてもそうだ。

戦事を示すためにこそ、軍部と云う命令系統が既にあるのだ。

幾ら最上命令権を持つとはいえ、掻き回されたのでは堪った物でもない。

前時代の、小国・小領の主であったならば、それこそが『働き』に値するのであろうが。

『国主の首』で勝敗を決されてしまう事態に於いては、自ら首を差し出されるだけであって、遺された国民らの生存権は決して穏やかには済みはしない。

「（元より、偽情報で翻弄して帝国軍から抜ける気ではあったがな。まさかあそこまで『考え無し』とは思っても見なかった。王駒（キング）が陣地を動き回るなど、『指し手』泣かせも良い所だ）」

そして、負けたからといって、謝って済む問題でもない。

それが重要になってくるのだ。

「私見ですが、敗戦国へ各国よりの対応は非情に厳しいモノとなってくるでしょうな。宣戦布告を掲げたのは他でもない帝国、皇帝が崩御したからといって『はいそうですか』とは済ませて貰えないかと思えます」

最も問題視されるであろうことは、賠償金の支払いだ。

貴族は溜め込んだ財を吐き出さざるを得なくなるであろうし、平民から搾取しようにも接収が追い付かなくなっていたことは先の事態でも自覚済みだ。

そもそもがそうした無理を押し通そうとしたのが宣戦布告に繋がったのだが、そのような事情を諸国が汲んでくれるとは思えない。

生き恥を晒した彼らだからこそ、『後始末』を『どうにかしてもらえる』段階などとう

に過ぎているのだと把握できてしまっていた。

「……実は影武者であった、という可能性も無いか……？　貴様の部下が、皇帝から密命を帯びて逃している、とか……？」

だからこそ、ヘイドンは見苦しく足掻く。

誰もがその『立場』に収まりたくが無い故に押し付けられたからこそ、『どうにか』と差し出すべき『責任者』を他人へ求めるのだ。

だが、ゼストは無情に切って捨てた。

「ないでしょうな。そのような余裕があったのならば、そもそも戦線も維持できております」

そもそも斥候部隊は戦争から脱け出す『つもり』が満々であったのだ。

誰より嫌っているヘラルドを守る気など部下にあるわけが無いし、負けの見えている国家に従う予定も無かった。

其処までは明け透けにするわけもないが、別の情報を挙げてゼストは断言する。

縋るような目を向けていたヘイドンであったが、その様相が変わらないことを見てがくりと項垂れた。

漸く、現実を受け入れてしまったのかも知れない。

「……それで？　これからどう致します。生き残った帝国貴族の方々は、それを議論するために此処に集まったのかと存じますが」

誰もが目を伏せて、『責任者を探す』という望みを絶たれたことを受け入れがたく思っているであろう貴族らの中で、ゼストだけが常と変わらぬ態度で問いかけた。

本来ならば、平民である彼がそのような発言をしたこと、並びに議会に居残っていることは咎められるはずであった。

だが『どうしようもない非常事態』に陥って、その『常』と同じように対処しようとする者は出張ることも無かった。

誰もが、何も手段を思いつかなかった為だ。

状況を打破しようとする思想が、育まれなかった所為だ。

そもそもこの貴族らの集会は、皇帝が健在であった頃から議会と云う名ばかりで。

基本として皇帝の一括的な発想を持ち上げて、どのように達成させるかのみを論議す

る『悪巧み』の形式にしかなっていなかった。
平時からそんな思考と思想でしか生きてこなかった者たちが、緊急事態を想定して対策を練られるわけもない。
出来ていれば、こんな事態にも陥っていないのだから。

蜥蜴の尻尾の様に切り捨てるつもりであった帝国に、改めて問いかけたのはゼスト並びに斥候部隊の立ち位置を再認識させるためだ。
既に仕えるべき主はシュトロームへと鞍替えを済ませてあるが、元の主（帝国）は完全に滅亡したわけではない。
此処から『どのように』復讐を積み上げてゆくのかまでは、彼らに一任されたわけでもない。
だが、結局のところ彼らは『道具』という立ち位置から、自覚の無いままに外れることが選択できなかった。
自分たちを『使う』者に『信用』が欲しい。
そしてそれを正当化することに、かつて殉職した仲間の尊厳、そして平民である自分たちの命を蔑ろにした帝国貴族に対するコンプレックスを秤へ賭けた。
その結果が、未だ泥船（帝国）に乗ったまま使われている、という選択だ。

内部から帝国を腐らせる作戦の一環として未だ身を潜ませている、とも伺えるのであろうが。

どちらにせよ、シュトロームが唆した『魔人化』の施術を未だ受けていない彼らは、帝国へ対抗できる実力を得ていないと思考している。

故に『使われる』のだと、潰れた面目を保つためだという理由を滲ませる意味合いを含めて、帝国貴族へ『道具』であることを示したのである。

「……っ、対外費用を徴収する。貴族からだ」

「っ、宰相閣下それでは示しがつきません！　貴族の生活を犠牲にしろと云うのですか!?」

「国が亡びるかどうかの瀬戸際だぞ!?　生活だの示しだの、国が亡びては元も子もないわ！」

国としての『何』を守るのかというのが、実のところは重要なのだが。

集団としての生活しか知らなかった彼らは、帝国が滅んだ後に『何もできない』ということだけは自覚できている。

だからこそ、身銭を切る必要に迫られているのだと、ヘイドンは吠える。

それに、これまでに仮にも国政を担ってきた彼だから、財産を蓄えている者がどのような行動に出るのかを推測が出来ていた。

「事態は一刻を争う！　斥候部隊はこれより接収部隊として各貴族らの財源を徴収できることを許可する！　皇帝代理特権に則って命ずる！　急げ！」

「承ります」

「……っ！」

居合わせていた貴族らが息を呑む。

責任を取らせるための代理席が、一転して自分たちの首を獲りに来たのだから。

そうして命じたのも、財産を持つモノらが国外逃亡を果たす可能性をヘイドンが読んでいたためだ。

逃げても、かつてと同じような貴族らしい生活を維持できる保証も無いが、恐らくは彼らに其処まで想定する頭も無い。

逃げ続けて、蓄えていたはずの財を無駄に使い散らすことになるであろう、と想定した。

そうされるくらいならば帝国の為に財産を吐き出させよう、というのがヘイドンの命

である。
しかし権限を与えられながらも、ゼストは一抹の不安を抱いていた。
「(……帝国周辺に集められるはずだった魔物たちは、どうしたのだ……？　あの強大な魔法を配したのがご本人だとも思えない、そもそもどういう事態が戦線で起こったと云うのだ……？)」
疑問は抱くが、大手を振って帝国貴族を攻(イジ)める機会を得られたばかりである。
幾許かの部下らのストレス解消にでもなれば良いと、出来る上司であるゼストは浮いた疑問に蓋をした。

■

元より、俺にはこの世界をどうこうと変えるつもりもなかった。
『実験』に勤しむのはもうライフワークのようなモノで、それで新しい発見とかが出来れば万々歳という程度。
生活基盤を変えようとか、文化水準を上げようとか。

そんな思惑は別段抱いても居なかった。
以前にも回顧した通り、俺の目的は『命を欠けない失敗学』。
誰を犠牲にしようとか、何かを削ろうとか、そういう思惑を働かせることはしないし、したくない。
其処に繋がるであろう発展の裏にあるパラダイムの更新も出来ることならば回避したい懸念でしかないので、やはり嘴を挟むことには躊躇が生まれる。
というか、警戒に関しては二言三言アレな想定を宛てたアールスハイドも、内情としては別段何を悪いとも思っても無いからなぁ。
改善点も、時折調子に乗る若者が出るくらいの民度もそう悪くも無いのだから、前世日本と比較しても全然及第点だ。
住み易いのだから、それだけでも充分で過分。
単純に、間違っている部分を間違ったままでは、いつか必ず間違いのしっぺ返しは来るよね、ということだけは学んでおいてもらいたい。
マーフィーの法則だったか？
失敗する余地があるならいつかは失敗する、とかだったはず。うろ覚えだけど。

そんなわけで、俺が王国へ配した僅かな種は、生かすも殺すも王国次第だ。

長距離超高空移動魔法も。
原因と結果を過程を備えて思考する科学的考察も。
自分たちの選択に対して『誰が』『どのような』思考を捉えるのか、という論理的な因果推定も。
今回は急場凌ぎを求められたから応えたけれど、元より俺は『魔法の鏡』である気も無い。
いずれ追い立てられるだろうけど、その全部を受け止める気も無いのだから、適量で孵すくらいしか小手先を介さない。

というか、けっこう適当に返したモノも多かったから、どっか間違ってる部分もあるだろーが。
元々完璧超人で居る気も無かったし、そこらへんツッコまれるのは良いんだけどね。
というか、ツッコむよな？
それくらいは成長するよな？
成長してくれるよな？
『そうなるよう』に、勉強に対する『興味』を失わないように、した。
詰め込み過ぎない、答え過ぎない。

想像力を観察から働かせられるような思考を下地に備えさせられるように、僅かな疑問も見逃させないような口先三寸でちょいちょい弄ってきた。
教育って奴は、基本として『好きこそモノの上手慣れ』が実情だ。
アレが楽しい、だから学びたい。
そういう『興味』を湧かせるように仕向ければ、放っておいても『学んで』くれる。
だから、それくらいは成ってくれよー？
このひとスゲーっ、で思考止めるんじゃねーぞー？
まあ正論言われても聴きたくない人間が居るのは普通だから、其処を擽るように若干の球磨川先輩ムーヴもやったのだけどもさ。
あの人のキャラって、転校生としちゃ実に『敵役』だよね。
今回、講師だったけど。

妹姫様？
アレは……付いて来れる方が可笑しいわ。
若干無理かと思って、せっつかれもしたし疲れもあったから圧縮授業にしたけども。
妹姫様、優秀過ぎない……？　アレがアールスハイド王国王族の本領発揮か……。

「おーい、オブシディアス先生ー、先生も手伝ってくれよー」
「手伝えったってねぇ。このくらいの魔物でどうのと云わなくとも」
「いや、暢気すぎるだろ……っ！」

のんびりと呼ぶのは、先ほどまで大量に湧いた魔物らを剣で斬ってたシン・ウォルフォードくん。

ダームからの帰り道に、魔物の群れにエンカウントしたので働ける若者に役を担ったのだが、王子様には不満のようである。

ダームでも火器実験やらかしたわけだから、身を慎む意を込めて表立つことを、つらつら思考と共に控えたわけだったのだが？

そもそも飛んで帰れば良かったのに、誰もがアレはちょっと……と辟易されてしまったのだから、そりゃあ俺だって自重する。

その帰りは国境なのだし、国の配備が及ばない地域なのだし、魔物とのエンカウントだって普通じゃないか。

「それを間引くのがハンターの役割だ。どの国でも、その点を踏まえているからこそハンターの活動を重視している。ダーム周辺では帝国の進軍があったからそれを凌駕し

たのだろうが、この数は流石に多すぎる……っ！　魔物が増えているとは聞いていたが、それでも異常だぞ……っ！」
「お、おう、そうだよな。だから、魔法は無しだぜ！」

……？　なんでウォルフォードくんは後ろめたそうにどもったん……？
いやまあ、『魔物を増やす』攻撃魔法に関しては禁制中だから、誰も前線に出ようとはしていなかった、のは理屈では判るけど。
というか、それを踏まえずとも。
連れ立つ面子は賢者様と魔法学院講師と魔法学院生と、と攻撃は出来ずとも索敵に役立てそうなのが出張って来てるんだし。
俺が働くのは王国への脱出路を確保することで充分だったのでは。
とりあえず、理屈をどうのこうのと言いはしても、だ。

「緊急事態に関しちゃ優先すべきは身を守る事でしょうよ。魔法攻撃に関して思うところ有れども、流石に命賭けてまで制限掛けようとかは命じはしないでしょうし」
「うむ、其処までは言わぬよ。元より、『国内での』魔法使用に関する制限であったのだしな」

「ディセウム……、アンタそれで良いのかい……」

導師様が王様へ疲れた顔を見せる。

法の隙間を通るような真似を、他でもない王族が口にしちゃぁねぇ？

ところで、いっこ気になったことがあるのだけども。

「訊いても良いですかね、ウォルフォードくんの制服なんですが。魔物の魔法を霧散させてましたけど、魔法学院で配られる制服って、そんなに規格外なモノでしたっけ？」

「……メリダ殿？」

「……私が施したんじゃないよ、シンの手製さね」

うん？　学院からの支給品である制服って、改造許可とか下りてたっけ？

索敵なのか、他方を向いて答える導師様に、俺はそんな胡乱な疑問を抱くのであった。

もう無理もうダメそろそろエタる

「……状況を、整理しよう」

王国帰還後、沈痛な面持ちで口火を切ったのはご存知色黒白髪であった。

議題は『ウォルフォード孫の制服性能可笑しくない？』という彼からの疑問に対して、その場にいた全員が漸く意識した『規格外魔道具』の存在に当たる。

実のところオブシー本人には一切非が在らず、原因と問題は完全にシンに由来する。

由来するのであるが、当の本人が一番わかってい無さそうな顔で、しかし何処か落ち着かないご様子。

例えるならば悪戯がバレた子供のような挙動にも伺えた。

「先ず、ウォルフォードくんの着ているそれは学園支給の制服だ。それは間違いがありませんか？」

「うむ、魔法学院並びに色は違えど三大高等学院にて普及されているモノだ。私が保証しよう」

頷いたのは他でもないアールスハイド王国の国王陛下だ。
ディセウム・フォン・アールスハイドの証言を得られることは既知であったのか、然程の動揺も無くにオブシディアスはほむと頷く。
むしろ其処で確認を取るべき第一人物がその場に居るのだから、動くのは当然だ。
動かれない場合孫の立場が一番亡くなるので、改めて守ってもらえている立場にあることをシンは自覚しなくてはならない場面でもある。
しかし、相変わらず当の本人は何を問題視されているのかわかっていない様子だ。
わかっていたら、そもそもこんな事態にもなっていないのだから、ある意味これも当然の因果とも呼べる。

「その『魔法を分解する』効果も、一律で普及されてる魔道具だと？」
「いや、それは知らない。メリダ殿が施したのでは？」

問題点その1、異常な効果。
其処を挙げたモノの、流石に知らないことまでは王であっても呑み込めないようである。

しかし【導師】という称号まで与えられているメリダの技術力は魔法国随一と呼べるので、其処に遜ったという理屈も働いてはいる。

美徳足る『虚言を避ける』『誠心誠意』の心情が国主としての立場として働いた所以でもあるが、ディセウムは元々導師並びに賢者の率いる一団に所属していた経緯がある。

未だに頭が上がらない国主が多勢居る。

それがこの辺りの国家事情であったので、平衡する意識からは彼女を称えることはあっても庇護下に置けるとは誰もが捉えられていなかった。

「いや、それを施したのはシンさ」

だから、彼女の意見も真っ当に吐かれた。

王国民としての美徳、並びに、孫が嘘は吐けないであろう点を省みても、庇護することが不義に繋がるであろうことを見抜いて、メリダはむしろ開き直るように申し出た。

シンが『やらかした』ことは、術式付与を『その場で』見ていたがために把握している。

ならば、其処を秘匿することは最早不可能と判じて、メリダはむしろ彼の功績を称える方向へと舵取り出来ないか、と皮算用も秘かに働かせていた。

「アタシの目の前でやったからね。何なら、もう一度やり直させても構わないよ？」
「ちょっ、婆ちゃん!?　これ隠しとけって言って無かった!?」
「バレちまったら仕方ないさね。ちょいと値を吊り上げるけど、こうなれば得を取れる方に傾けな」
「ていうか何が問題なのか俺未だに分かんねぇんだけどもっ」

しかし、オブシーの見抜いた問題点は、事情を詳らかにしたとして決して吊り合いはしない。

「それは、導師様の許可の下、という認識で間違いは無いんですか？」
「ん？　アンタは何を言って……。いや、まさか……」
「導師様が『許可を卸した』と、そういう方向で？」

メリダは聡明だ。
オブシディアスの問いたいことは、直ぐに理解できていた。
そして、相手が虚言を呑むのか否かを見極めようと沈黙を選んだメリダに代わり、シ

ンが口を開いた。

「オブシー先生、あんまり婆ちゃん虐めんなよ」

「俺は『どうなのか』と訊いただけなんだけどね。選ぶのは導師様自身だ」

言い分をなぞれば、それは決して追求ではない。

事実、一度問題点が上がったからと、それを理由に引き出して議会か論考の様に悪し様にひけらかす趣味は彼にも無い。

実のところ、彼としては虚言でもなんでも、上手い事なあなあにして事を済ませられれば問題も無いかなぁ、などと内心で思っていた。

それを明け透けには晒せないのは、この場に居るのが当事者だけでは無いが為である。

しかし、『事を荒立てたい』と捉えてしまったシンは、そんな彼に叛意を抱いていた。

敵だと、捉えてしまっていた。

実のところは一切そんな気も向けられていなかったのに。

「婆ちゃんは全然口出ししてない！　これをやったのは俺で、やると決めたのは俺自身

だ！」
「えー……」

思わず、オブシーの口からドン引きの声音が漏れた。
改めて、この国では１５から成人と見做される。
それを皮切りに自らを育ててくれた家から出立し、魔法学院へ大学進学に近しい気持ちで進出してきたのがシン・ウォルフォードである。
未だ成り立ての成人意識を働かせようとするシンは、今度は自らが守る番だと、宣言と伴って自負を旨に強調したのだろう。
いいのかよ、という意味の視線が、オブシーから陛下並びに賢者と導師へ向いた。
言っちゃったものは仕方がないよ、と無言の肯定が交わされる。
「あー……、ちなみに、許可はどういう風に貰ったんだ？」
「え？」

どうにも、自身が気を張ったのに、のれんに腕を押すかのような手ごたえに、シンも拍子が抜ける。

言葉が通じて無いんだろうか、とオブシーは問い方を変えた。

「制服を貰った時、どういうやりとりをしたんだ？」

「え。えーと、付与が拙いなーって思って、変えても良いかな？って……」

「許可、卸したんですか。魔法学院の教職ですよね？」

「いや、そんな権利は教師にも無いが」

魔道具は、改めると個人が製造権と支出権を備えた、ぶっちゃければ大量生産に向いていない仕様になっている。

大量生産の方法も、流通の稼働も存在はするが、其処まではシンも未だに知らない事情だ。

そちらはさておいて、基本一律で製造されるとはいっても、権利に続いて利益も製造者本人に付随するのだ。

当然、其処には生じる責任も圧し掛かるのであろうが、だからこそ、それを改竄することは誰にとっても憚られることに繋がる。

そんな権利にまで手を伸ばせるかと云えば、魔法学院の教師にも無理な話だ。

ディセウムの弁は教職の庇護を働いたことと同時に、この国へ於ける責任の所在につ

いての信頼も保証されている。

「どうなんだ？」
「いや、止められはしたよ？」
「……？　じゃあ止めろよ」
「でも婆ちゃんならどうですか？　って聞いたら、ああ導師様なら問題ないですね、って」
「うん。うん……？」

思わず、小首を捻る。
子供と大人の遣り取りにも聴こえるそれを、横から補填したのが殿下だった。

「その場には私も居たぞ。確かに、そんな遣り取りをしていた」
「……それ、結局『許可』は貰って無いのでは？」
「えっ」

シンが頓狂な声を上げて、メリダがそんな彼へと詰め寄っていた。

「シンーーー!? アンタ勝手にやってたのかいーーー!!!」
「だ、だって、婆ちゃんレベルの付与術使えれば良いんだ、って」
「アタシだって許可が下りたモノと思ってたよ！ そもそもヒトの造ったモンを勝手に改造することが赦されるもんかい！」
「儂はメリダ殿が許可をしたのだと、若しくは、付与をやり直したのだとばかり……」

悲しいアンジャッシュの結末である。

「あ、――……、じゃあまあ、その制服はウォルフォードくんの買い取りってことで」
「それで済む話じゃないんじゃ……」
「知ってるけど、仕方ないよ。なんかほっといたら要らん余罪が浮上しそうで関わりたくねぇ」

そう、その場には他国へ同道した者も結構いたのだ。
呆れてツッコむマリアに、オブシーは明け透けな理由で匙を投げた。

「ねえねえ、ところでこの字、なんて読むの？　見たことの無い字なんだけど、これで付与できてるの？」

アリスがはちゃめちゃＭａｘなウォルフォード家の説教＆反省劇場をまるっと無視して、もう一つの問題点である『制服』そのものを突いた。

これで話を〆たかったオブシーは、非常に嫌そうな貌である。

「導師様、その辺で。で、ウォルフォードくん、どうなの？　これ、効果と性能の程は」

「うぅぅ、今日はなんて日だ……」

己のツケである。

「えーと、書いてあるのは『絶対魔法防御』と『物理衝撃完全吸収』と『自動治癒』に『防汚』の四つな」

「絶対、魔法防御……！　そんなことが可能なのか……!?」

「俺も相当苦労したよ、そのイメージを作り上げるために、ね」

「問題点は其処だよ」

ディセウムがシリアスな顔付きで驚愕を顕わにしたことで、シンもまた自負を取り戻して訳知り顔で頷くのだが、オブシーはツッコミをいれて梯子を外した。
ドヤれる瞬間が来たかと思えたかもしれないが、そうは問屋が卸さない。

「ウォルフォードくん、イメージって言ったな？　字面そのものをなぞるのではなく、イメージを付与した、と」
「お、おう。……っていうか、魔法はイメージが重要だろ？　俺、なんかやっちゃった？」
「やっちまったなぁ……！」

シンは上半身半裸で餅を搗く芸人を思い出した。
しかし、口を挟んだのは、

「なるほど……！　造り手のイメージさえ准えれば、其処に『どのような文字』が描かれていようと効果は膨大にできる、ということですね……！　例え使い手に『読めなくとも』……！　それは素晴らしい発見だ……！」

歓喜の声を上げたのはシュトロームだった。
魔法学に対して熱心な研究者であり探求者である彼にとって、この『発見』は大いに興味をそそられるモノであったのだろう。

「そうですね。他国を内側から破滅させるには、もってこいの技術だ」

オブシーに続けて断言されたことで、誰もが冷水を浴びせられたように絶句する。
効果が判らないのに発動できる。
これの真価はつまり、そういうことだ。
どんな効果かも知れない魔道具を流通させれば、内部破壊工作には至極簡単に流用できる。
その『発見』をどうするのかは、未だ誰もが答えを出せないままである。